昭和47年1月1日発行
発行所
名古屋市中区長門町6ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

あけましておめでとうございます。毎年のことながら、新年を迎える感激は新たなものがあります。この感激を日々日常につなげて行けるならば、それは有為義な人生と云えるのでしょうが、本当に困難なことです。

ゆく川の流れはたえずして、しかももとの水にあらず……

昨年の名古屋能楽界も、本当に多くの話題に包まれて過ぎ行きました。幸事、悲事、多彩に識りなしながら流れ行く時の流れにあらためてしばしの感激にひたりつゝ新年を迎えました。すべてを呑み尽し、遠い彼方へ押しやってしまう時の流れに、ともすればのめり込みそうな私達、せめても確実な足跡をその流れに刻みたいものです。

札幌オリンピックという輝かしい幕開けが準備された一九七二年、どうか皆様にとっても有為義な年でありますように——。

謹賀新年

昭和四十七年元旦

狂言　共同社

一月の催能

一月七日　学生能と狂言の会　午前九時始

能　右近　酒井祐子　米山直美　高安滋郎

能　田村　石川賢一　山本直美　一柳美恵子　西村欽也

間　大塚公人

能　雪　伊藤育子　高安滋郎

間　伊藤利夫　尻江晴夫　高安勝久

能　小鍛治　川口敏雄

間　牧村昭司　河田公明

狂　末広がり　神尾広明

一月十五日　邦謡会

一月十六日　清韻会

能　高砂　大槻文蔵　西村欽也

間　佐藤友彦

能　葛城　大槻秀夫　岡次郎右エ門

間　井上松次郎

能　安宅　観世元昭　高安滋郎

間　野村又三郎　佐藤秀雄

狂　素袍落　野村又三郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

一月廿三日　三人の会

能　求塚　泉嘉夫　西村欽也

間　井上松次郎

能　綾鼓　和島富太郎　高安滋郎

間　野村又三郎

狂　鈍太郎　野村又三郎　井上礼之助　佐藤友彦

一月卅日　観衛会

能　屋島　山本勝一　西村欽也

間　野村又三郎

能　卒都婆小町　山本博之　岡次郎右エ門

葵上　梅若六郎　高安滋郎

間　井上礼之助

狂　腰祈　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄

狂言解説

末広がり＝末広がりを求めて来いとの主命で都に上った冠者、例のごとくスッパにだまされて古傘を買わされてしまいました。激怒した主の桟嫌を直さんと、太郎冠者はスッパに教えられた囃し物を始めます——。

脇狂言として代表的なものです。

素袍落＝急に伊勢参宮を思い立った主命で、冠者は伯父のもとへ誘いに出かけました。急な話に伯父は断り、お供に参ると云う冠者に振舞酒をし、代参にと素袍まで与えます。冠者はすっかり上桟嫌千鳥足で帰る途中、様子を見に来た主と出くわしました——。

鈍太郎＝久方振りに帰京した鈍太郎上京の我家の門を叩きますが、妻は悪戯者の仕業と門を開けてくれません。仕方なく下京の愛妾のもとへ行ったものの、これも鈍太郎と信ぜずすげなく追返してしまいます。世をはかなんだ鈍太郎は仏門に入ると云い残して去りました。あとで鈍太郎と知った二人の女がその行方を捜す所へ、念仏を唱えながらやって来る僧形の男——。

腰祈＝山での修行を無事修めた駆け出しの山伏、久し振りで百歳に余る祖父を訪ねました。見れば腰も曲って立居振舞も不自由な様子、早速習い覚えた祈祷で祖父の腰を延ばしにかゝったのですが——。

田鍋惣太郎師を悼む

師は四十六年十一月廿一日観世定式能に於ける「野宮」の舞台を最後に十二月四日朝十時安らかな大往生をとげられました。

師の経歴等は師の著書「小鼓芸談」に詳しく記されておりますが、師は明治十七年十二月十二日名古屋の袋町で誕生、八才より宝生流謡曲を、十才より幸清流小鼓を始められ、数へ十三才にて初舞台を勤められ爾来七十有余年斯道に精進致されました。

又名古屋能楽会の設立。三役の養成等明治、大正、昭和、の三代にわたり当地能界の発展に尽されましたその功績は誠に枚挙にいとまがありません。

昭和三十二年県は文化功労者として教育委員会より、国は四十年十一月三日に勲五等旭日双光章を賜りその功績を讃へております。

名実共に不世出の師と申されませう茲に謹しんで哀悼の意を表し御冥福を御祈り申しあげます。

狂言念々

野村広一

新年おめでとうございます。

昨年は、例年とかわらず、話題の多い年でしたが、めざましくまためでたい諸事に加えて、とりわけ悲事が大きく胸を打ちました、六平太翁逝去と喜多流家元継承、芸術祭能、老女物の上演と復曲、祝賀と追善能、天覧狂言会に多彩な狂言会、人間国宝指定、叙勲、受賞と二回にわたる海外能、能楽堂建設、これは金沢新能楽堂完成、新観世会館の工事開始、国立能楽堂の設立要望、それに能楽後継者の養成など、一事に千万言を費してもなお書き足らない程です。なかでも十二月に入って四十六年度芸術祭大賞が狂言の野村万蔵、三宅藤九郎両氏にきまりましたが兄弟そろって受賞は、これまでにない嘉例でしょう。これにひきかえ、年の始め一月には喜多六平太翁、年末十二月になって名古屋では田鍋惣太郎氏が永眠されたことは、どちらも長寿でしたが、返えす返えすも能愛好者に深い寂寞（せきばく）を与えました。昨年他界された、名古屋にゆかりの深い高橋静夫氏、東の面打師鈴木慶雲、西の北沢如意氏ほかの方々とあわせてみなさまのご冥福を厚くお祈りしたい。

いつものように、右の二、三について大小の記録を綴ることにいたしましょう。まづ狂言のこと、狂言界の三長老、東の野村万蔵、三宅藤九郎、西の茂山千作翁が健在であることは何よりうれしいことです。千作翁の春の海外能参加、東西と名古屋の狂言の活躍、後継者稽古に専念は特筆したい。これは万蔵、藤九郎兄弟両氏にもいえることです。年来の修練の賜物、別に何でもありませんと三長老はいわれるかも知れませんが、狂言に対する愛憎の深さがひしひしと身に迫ります。一昨年の故野村万斉追善、藤九郎古稀祝賀狂言会で大きな話題をつくり、続いて昨年は芸術祭大賞の受賞決定、この兄弟二人の好日に心からお喜びを申し上げたい。去年の狂言会は、二流による狂言あとりえの会別会、西の新作、復曲もおこなう狂言小劇場の発足に、高松市の鷺流狂言の会、狂言、長唄、バレーによる「狐三題」の会、「オイディプース王」上演などの能、狂言と現代演劇や邦楽の觸れ合いの度も高いものがありました。四十六年は「釣狐」も数回演ぜられました。共同社が設立八十周年を記念する名古屋和泉会で八十才をこす佐藤卯三郎氏が同曲を勤め名古屋のよき狂言芸をみせたことの併記も忘れてはなるまい。故善竹弥五郎翁の十七回忌追善狂言会も東西で催された。名古屋勢は「梟山伏」（松・礼・秀）で大阪の追善会に参加、弥五郎翁がなくなられてもう十七年になりますが、梅若実さんが死去されて十三年目左近師の場合は、三十三回忌の年に当ります。実さんも左近師の追善会も当地でおこなわれ、生前の高い能芸をしのびあいましたが、そのとき梅若六郎氏が父上にたむけた「撰待」はまことに印象深い一番です。大きな追善会の催された四十六年でした。それと、小鼓方、田鍋惣太郎氏が鬼籍に入られたことは、八十八才の大往生でありましたけれども、名古屋の能楽界に大きな光と影を投げかけました。時代の変革には和と勇気が格別必要だとおもいます。病気養生中の田鍋惣一郎氏を守って、後藤孝一郎、福井啓次郎の両氏はどうか名古屋小鼓方の名を輝かしていただきたい。

昨年十一月号のこの稿に、十一月を経て本年棹尾の十二月までよき演能を期待したいとしるしました。その直後の十二月初め、田鍋さんは忽然として長い旅路に立たれた。能に生き能に死なれた。十月「定家」（大槻秀夫）。十一月「野宮」（片山博太郎）を打たれ、その序、舞の途中で後見の後藤孝一郎氏が代って後に控えられ、おわって笛の藤田六郎兵ヱ氏につづいて、いつもと余りかわらぬ姿で退場される老先生に拍手が三度もわいた。爾後養生一日まではお好きな酒を口にされたとか、五日お別れに山の手のお宅を訪ねた。にこやかな与真の笑顔に対して、「田鍋先生さようなら」のことばものどにつまる。「微妙」の扁額が、文字通り微妙なふんい気を部屋に与えている。老先生の口元は「君、わたしは最後まで舞台を勤められてうれしかったよ」と生前の口調で語りかけておられるようであった。沈思の長い刻が過ぎた。老先生はNHKの放送開始以来の放送出演者で、今では数少ない名古屋の全国放送の出演者で、雅楽の放送には笙を受けもたれ、「早甘州（はやかんしう）」では箏との合奏もされた。

賀　正

ふごや

河文

電話代表(231)一三八一番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

くりな

船津屋

電話栄名代表(22)一八八〇番

演奏はなかなかきびしかったが、モダンでわかりのよい邦楽人であった。終戦後の能楽復興と邦楽界復活には並々ならぬ力をそそがれた。それが一つには放送による呼びかけのカタチをとりやがて新能楽堂建設までの十年間、意を同じくする方達と渾身の活動をされた。二十年十一月名宝劇場で終戦後最初の演能がおこなわれ、荒廃した名古屋に古典芸能の新しい芽を吹かせてから、実に長い年月苦労の仕通しであった。あるときは小学校、またあるときは女学校それから商工会議所の講堂、他方御園座と三転し四転し、好意ある松阪屋ホールの仮設舞台となり、三十年の新能楽堂の時代を迎える。その間も、語り伝えてよい好演は生れ、人々は日本の美のふるさとにかえり、それを掴むことができた。故兼資氏との一調「夜討曽我」、先代厳氏との一調「感陽宮」の放送（NHK、以下断わりないときはこれにおなじ）は思い出つきない傑作といえましょう。

故人を口にされるときはきまって先代宝生九郎氏に先代万三郎、兼資、先代厳、弓川の五氏の名前がでた。故宝生新、京都時代の川崎九淵両氏のこともちろん狂言にも温い理解を持たれた。十一月二十日の放送「田鍋惣太郎、その人と芸」（CBC、名古屋市民芸術祭参加）で「老女物は打とうとして打てるものではない」と語る田鍋さんは、「関寺小町は一生に一度こっきり、手はどうかしたっておぼえるよね、心の深さが、一番深いものですよね」（FM能楽放談）ときき手の増田正造氏に話す幸祥光氏の心境とも相通ずる高さがあった。

比米町の藤田さん宅に寄遇しておられた当時は、堀川を隔てたNHKからよく通って、無遠慮に話しかけ、これには何事もよらず丁寧に包まず教えられた。にぎやかな時代であった。大久手に居を構えられてからもそうで、訪ねると、まづご自身お茶をゆっくりたてられ、銀の器の蓋をとって菓子をすすめられた。「なにさま」ということばがよく口にでた。正月の翁、三番叟の掛軸に兼資筆の「能楽」の横額はいつまでも忘れることはできない。「目立たず」しかも小鼓の使命を忘れず、気合と気合をぶっけあって不即不離、互に一心になって能のふんい気をつくりだしていく、そういったわざをこえた円熟の境地であった。春の東照宮の例祭でかって舞われた陵王の肩に桜の花びらが散りかかるひとときは目前にありありと浮んで止まない。告別式の当日六日は朝からモヤの多い、やがて薄日の射す日であったが、故太田一三老人手作りの小さな作り物「野宮」を飾った。惣一郎氏は病床、継承の重責は青年洋一君の双肩に。大勇猛心を持ち給え。すでにともされた小さな火を大切に、消さないように。道は遠くけわしい。「一事を必ずなさんと思わば他の事破るともいたむべからず。人の嘲りをも恥ずべからず。万事にかえずしては、一の大事、成るべからず」（吉田兼好、徒然草）「凝れば妙あり」（日本の諺）の二つを呈したい。

さて、昨年も有益な本が沢山でた。「芸能と芸術論と」（島津忠夫）「能面にみる中間表情論、若い女面」（中村保雄、ともに芸能史研究三十三号）「続世阿弥新考」（香西精）「観世左近追想」（観世毎号掲載）「能の表現」（増田正造）は谷川徹三先生の「縄文的原型と弥生的原型」とあわせて熟読する。「明治の京都能楽界」（弟保泰介、金剛八一号、第一回）も。能楽タイムズの「鏡の間寸描」（山崎有）「狂言随想」（三宅藤九郎）が楽しい読み物であったことも付け加えなくてはなりません。放送では「桧垣」（楼間道雄）がきき物、テレビは十回は越えたでしょう。国立小劇場の「幸若舞」と「声明」の公演はみたかった催しの一つでした。

四十六年の名古屋は昨年とおなじく狂言も能もさかんに催され、愛好者をよろこばしてくれました。各流の演能に、今はなき田鍋惣太郎米寿記念祝賀能、左近追善能、梅若実追善能、能楽の友発刊五周年記念能、青少年芸術劇場能、狂言鑑賞会（文化庁、能楽協会）、大衆能、薪能、義捐金募集能、乱能に中日五流能。狂言は朝日狂言会共同社成立八十周年記念狂言会、やるまい会。東西からは万蔵、忠三郎両氏をのぞけば、ほとんどの狂言師が昨年も来名。「濯ぎ川」（千作、千五郎ほか）「千鳥」（大蔵弥太郎、忠一郎ほか）「悪太郎」（忠一郎、圭五郎ほか）「棒縛」（千五郎、千之丞、善竹十郎）「腰析」（藤九郎、右近、又）「雁大名」（万之介・万之丞・礼）「鎌腹」（万之丞・又・万作）「茸」（万作・礼・万之介ほか）「武悪」（保之・礼・松）など、どれも秀逸。万蔵氏はテレビデ、二人の孫、武司君の「いろは」良介君の「しびり」で濶達なわざに接しました。

共同社は四十六年も。活潑。六十番前後の狂言を演じましたでしょうか。やわらかく、きめこまかく、気の合った演じ方が特に目をひく。年末の「昆布売」（卯・松）はその目立った一例です。能では「三井寺」が三回（巌・万三郎・秀夫）、元正（草子洗小町・半蔀・砧）・英雄（舟弁慶・小督・望月）両氏がそれぞれ三回の来名、「三笑」（九郎ほか）が舞われ、「鸚鵡小町」（山本博之）が演ぜられ、「道成寺」も上懸りで三回催されたことなど筆にとめたい。なお「道成寺」は近年おこなわれない下懸りで一度みせていただきたいものです。

学生能も婦人の研究・鑑賞もさかん。若い時代層が演者、見所に多いことはいうまでもありません。名古屋の能では殿島修二氏の「翁」をあげたい。能・狂言の周辺では「土蜘」（松緑）「娘道成寺」（梅幸、ともに御園座）「菊慈童」「舟弁慶」（西川流名古屋をどり）「当麻曼陀羅」（山路躍生舞踊リサイタル）が発表され、北設楽の民俗音楽（花祭り、神楽、田楽）の採集が名古屋民族音楽研究会でおこなわれていることを付記したい。

年末の放送は「狐塚」（藤九郎、保之ほか）をみる。本は「古典の細道」（白洲正子、新潮選書、世阿弥、業平ほか）「叱られる」（滝井孝作、心十二月、志賀直哉追悼、英雄の求塚と漱石の「心」）「リリジアス・アンビリーバー」（宗教的人間）」（谷川徹三、世界十二月、志賀直哉逝去を悼んで、東洋は老を一つの理想）「能楽芸話」（金剛右京談・三宅襄聞書、桧書店、末見）など。

今年の名古屋の能界の方々には伝承の問題と取り組み、体力づくりに留意を払われるようお願いします。四十七年が多幸でありますようみなさまと心からお祈りしたい。

名古屋狂言小劇場発足

狂言はかって庶民の詩であり音楽であった。中世動乱の世にうまれ、支配階級に対する豊かな抵抗精神に充ちた諷刺劇として、またリアルな庶民生活の描写の中に人間性の真実を高らかに謳い上げた喜劇として、大きな可能性を内在しながら出発した。

しかしながら六〇〇年の狂言の歴史は、徳川期以降権威に依り、大きな可能性を自ら閉ざす運命を辿り、やがて動きを止め、伝統の側に立つ姿勢を保つことによって今日に受けつがれている。

さまざまな意味から中世的世相と云われる今日、狂言はこの現代に生き得るか。ただたんに伝統芸能として保護、伝承されることのみにしかその価値は認められないのか——。

この会では狂言の持つ魅力をさまざまな角度から捉えつつ、より多くの人々に狂言に触れる機会を作ると同時に、その中で狂言の持つ現代性を探って行きたいと願うものである。

名古屋大声会
狂言共同社

第一回〈狂言をみよう〉

昭和四七年二月四日（金）午後六時始
名演会館小劇場（東新町）

解説　竹尾邦太郎

佐度狐　佐藤友彦
素袍落　井上松次郎
泉山伏　佐藤卯三郎
鷺見政行

二月の予告

二月六日　大蔵流狂言会
二月十一日　宝生定式能
能　高砂　野口緑久　高安滋郎
能　三山　内藤泰二　西村欽也
狂言　未定
二月十三日　観世会
能　忠度　観世元正　佐藤秀雄
間　佐藤秀雄
能　羽衣　観世喜之　福王茂十郎
能　敵馬天狗　観世元昭　西村欽也
間　井上松次郎　大野弘之
狂　佐度狐　野村又三郎　井上札之助　佐藤卯三郎
二月廿日　梅猶会
能　雲雀山　熊沢恵美子
能　杜若　梅若盛義
能　野守　梅若修一
狂言　未定
二月廿七日　青陽会
能　弱法師　上田昭也　高安滋郎
能　雲林院　塚本秀雄　西村欽也
能　熊坂　久田秀雄　西村欽也

能楽協会名古屋支部常議員
前田昌広氏　旧冬十二月十五日午前一時
脳軟化症にて逝去
行年七十二才
謹しんで御悔み申しあげます

能楽協会名古屋支部よりおしらせ

旧冬十二月催しました歳末助け合い義損能は純益を左記の通りそれぞれ、県、市へ寄託致しました。
各位の絶大なる御協力を感謝致します。

愛知県　拾七萬参百廿五円
名古屋市　拾七萬参百廿五円

謹賀新年

一謡会　河村鉦二
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
潤水会　林甲子夫
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
鼓雲会　内藤泰二
調友会

韻風会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
春鶯会　山田仁三郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
青陽会
能楽協会名古屋支部
名古屋和泉会
狂言共同社（イロハ順）

昭和47年2月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上直兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

暖冬異変とやら、ついに当地名古屋ではこの冬、雪らしいものにお目にかからぬまゝ、二月を迎えました。

立春、そしてお水取り、このまま春になってしまうのやら、暖かいのはありがたいことですが、雪の風情を味わえぬことにちょっぴりさびしさも感ずることです。

二十八前の戦争を生々しく呼びさまさせた横井さんの奇跡の生還、そして人類の輝かしい生への賛歌、冬季オリンピックの開幕、まこと人の世の織りなすあはれ、不思議なおもひがいたします。

二月の催能

二月　四日　「狂言をみよう」
於　名演会館小劇場
午后六時始

狂　佐渡狐　佐藤友彦
狂　素袍落　鷺見政行　井上松次郎　佐藤秀雄
狂　泉山伏　佐藤卯三郎　佐藤礼之助　大野弘之　佐藤友彦

二月六日　大蔵流狂言会

二月十一日　宝生定式能
能　高砂　野口緑久　高安滋郎
能　三山　内藤泰二　西村欽也
間　大野弘之
狂　戎大黒　井上礼之助　佐藤友彦　井上松次郎

二月十三日　観世会　午前十一時始
能　忠度　観世元正　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　羽衣　観世喜之　福王茂十郎
能　鞍馬天狗　観世元昭　西村欽也
間　井上松次郎　大野弘之
狂　佐渡狐　野村又三郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

二月廿日　梅猶会　午前十一時始
能　雲雀山　熊沢恵美子　高安滋郎
間　井上松次郎　井上礼之助　佐藤友彦
能　杜若　梅若盛義　西村欽也
能　野守　梅若修一　高安滋郎
間　大野弘之
狂　太子手鉾　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

二月廿七日　青陽会　午前十一時始
能　弱法師　上田照也　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
能　雲林院　塚本秀雄　西村欽也
間　佐藤友彦
能　熊坂　久田秀雄　西村欽也
間　大野弘之
狂　地蔵舞　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

戎大黒＝比叡山三面の大黒天と西の宮の恵比須に、それ〴〵祈誓をかけた男ありがたい示現をうけ、帰宅して勧請して待つ所に大黒と恵比須揃って現れ、それ〴〵の由来を語り、宝物を授けて、この家に二神ともおさまるというめでたい曲である。

佐渡狐＝年貢を納めに上り合せた佐渡と越後のお百姓、佐渡に狐の有無を云争い、腰の物を賭けて奏者に裁いて貰うことになりました。先廻りした佐渡は奏者に袖の下を贈り、狐の形恰好を教わるのですが、鳴声を聞忘れたために、結局越後にしてやられてしまいます。

太子手鉾＝主に無断で抜け参りをした冠者が太子の手鉾を持っていると聞た主は、冠者の許を訪れ、抜け参りを叱ると共に太子の手鉾を取り上げようとします。太子の手鉾とは実は聖徳太子が排仏派の物部守屋をさしとめて仏教をひろめた故事にことよせ、雨の漏り屋をさしとめる道具を呼びならわしたもの、冠者はおもしろおかしく話って聞かせます。

地蔵舞＝宿をとらんした旅僧、ところが、所の大法として宿の亭主は宿を貸してくれません。一計を案じた僧は自分の笠を亭主に預り、その笠の下に宿るとてまんまと宿に入りこみました。感じ入った宿の亭主は僧に宿を与えやがて二人で酒盛りが始まります。

能や狂言の扮装

西村弘敬

能や狂言の舞台上の扮装は古来より定まった型がある、能は能、狂言は狂言と、夫々独特の衣裳があり、特徴を持って居る。能の方ではシテ方、ワキ方、夫々の流儀の定めによって、同じ曲でも用ふる装束の種類や、又其着付方にも幾分相違のあるものです。又能によって小書などの為に、常とは替る装束を用ふる事もある。

舞台芸術の中でも、歌舞伎とか或は新劇など所謂芝居の方では、用ふる衣裳の種類が非常に広い範囲に渉って居て、殆ど実世間の人間の様相を忠実に写す様に工夫せられるが、能や狂言の方では装束の種類が限定せられて居る様で、従って実際とは違った扮装をする事になる事もある、而して実際には有り得ない不合理の事も生ずるのである。例えば素袍(すほう)や、長袴（ながかみしも）の袴はうしろへ長く引摺る様に出来て居るが、之れは屋内の床上や座敷などで用ふる筈であるのに、能や狂言では道を歩く様な役にも之れが用ひられて居る。能の角田川では、船頭が長袴で舟を漕ぐなど、考えれば誠におかしひと思はれる。又役柄に依り、場合により用ふる装束の品質などにも一考を要すると思ふ、安宅の能でシテの弁慶其他の一行は、鎌倉より追討を受けて、世に隠れる如くに忍び忍びに山伏姿に変装しての旅行なる故、夫れにふさわしい扮装すべきに、金ピカの素晴しい装ひでは誠に不相応の感じがする。尤も舞台を華やかに飾って美麗な様相を見せる意向とも思はれるが、義経の都落ちとしては余り感服致し兼る次第である。斯様に少し一歩退

いて横の方面より見る時はまだまだ色々の事が目に写る。こうした不合理不自然はいくらもある事でしょう。

狂言大小

野村広二

元日は雨。二日はこれにひきかえよく晴れてまことに正月らしい。元日から三日までは本年もまた終日テレビとラジオの芸能番組で楽しくすごす。今年のラジオの「翁」は喜多流、テレビ能の「鉢木」も喜多実氏。五流謡曲(老松・金剛、羽衣・金春、盛久・宝生、小鍛治・観世)と「鉢木」でまことにすがすがしさ一杯の元日の午前で、早々と在所から屈いた好物の卵焼きに、年末好意を添うした千支にちなむ銘酒をいただく。これに毎年棒鱈の煮付けがつくことはいうまでもない。みては盃を傾け、ほしてはきき、しばらくは庭にでて、まだ固い紅梅の蕾に目をやる。今年は暖冬のせいか質素に部屋を飾る梅の蕾の方はもう二日には二つ、三つひらきはじめる。その夜きれいなまるい月をみたが、正月のまるい月はめづらしい。その二日は「末広がり」(千作)「弥宜山伏」(万蔵)をみ、独吟や一調やワキ謡をきく、このうちに大蔵弥太郎氏の小謡・大黒連歌も加わる。三日は「入間川」「小謡・鶉舞」(藤九郎)と「素袍落」(忠一郎)ほか。実に能・狂言だけでもにぎやかであった。また三宅藤九郎氏からおくられた子年の小舞謡は次のとおりです。「子の日をば／子の日をば／我が吉日と鼠ども／ちょろり／ちょろりと穴を出で／親子諸共子を殖やし／その数かぞう鼠算／栄ゆく春ぞめでたき／／」。おなじく二日には三・四の本をひらく。まづ「哲学者の神」(カトック哲学者・故吉満義彦)、なつかしいカーディナル・ニューマンのことばで結ばれている。次に語録(世界教養全集別四、平凡社)から古代・中世篇をとりあげる。アウグスチヌスは「静けさが音の欠如によって静けさであるように、やみは光の欠如によってやみである。それとおなじように、醜と悪とは美と善との減少と欠如である」(服部英次郎訳)と語る。次は「英国的思考」。(福原麟太郎)のなかの「英国的笑」を。狂言「鬼瓦」のことにもふれて。あとはいつものように寸見になっていく。さて、初春の能楽堂にはおくれて二十三日の「三人の会」(泉泰夫・和島富太郎・又三郎)がはじめて、戦後喜多流が演目に加えて二回目所演に当る「綾鼓」(和島)はめづらしくまた新風あり、ひきしまった舞台はあざやか。狂言の「鈍太郎」(又・礼・友)は又三郎会心の出来であろう。

放送は「江島」(鎮之丞)「安宅」(後藤得三)「大江山」(友技喜久夫)「鉢木」(豊嶋弥左ヱ門)「日本音楽道しるべ・祝儀物(一)・高砂」(FM、小山弘志・吉川英史)をきき、「屋島・弓流し」(大西信久、解説・沼艸雨、放送はいづれもNHK)をみる。本は「七一年の回顧・演劇ベスト5・観世静夫の松風ほか」(石沢秀二選、朝日、四六・一二・二〇)「宝生流の海外演能旅行」(D・キーン、東京、日本との出会い38)「青柳瑞穂と骨董・老女面ほか」(井伏鱒二、文芸春秋二月)「春敵門」(名古屋金春流・広瀬瑞広短歌集、翁・石橋・禅竹など、寄贈)「奥美濃長滝の延年」(久野寿彦、朝日、一・一二)ほか。

二月は狂言大声会の初公演と大蔵流などや会がある。どちらも期待すると共に、大声会への実験劇場的希望の所感は次号に寄せたい。

三月の予告

三月　五日　九皐会　午前九時三十分始
千才　観世　武雄
翁　伊藤次郎左衛門　三番叟　野村又三郎
面、箱　佐藤卯三郎
能　吉野天人　余語さよ子　高安　滋郎
佐藤　秀雄
狂　六地蔵　井上松次郎　井上礼之助
佐藤　友彦
大野　弘之
三月十二日　観昭会　午前九時三十分始
能　葛城　鹿取　文子　西村　欽也
間　井上礼之助
能　隅田川　片山　清司　高安　滋郎
竹下　稲子
能　葵上　鷹羽　早苗　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　薩摩守　野村又三郎　井上松次郎
佐藤　秀雄
三月　廿日　邦謡会
三月廿六日　中日五流能　於中日劇場
第一部　午前十時始
能　花月　金春　信高　江崎金治郎
間　野村又三郎
能　蝉丸　観世　元昭　宝生　弥一
観世　元正
間　野村万之丞
能　海人　喜多　長世　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　お茶の水　高井　則安　山本　則直
山本　則寿
第二部　午后三時三十分始
能　安宅　豊島弥左ヱ門　宝生弥一
間　山本　則直　山本　則寿
能　井筒　梅若　六郎　江崎金次郎
能　邯鄲　大坪十喜雄　高安　滋郎
間　井上松次郎
狂　かくし狸　野村　万蔵　野村万之丞

商標　花甚　登録
株式会社

株式会社　花甚

本社　名古屋市中区新栄町4丁目
CBC放送局西隣
TEL 代表 (251) 0471
〒460

直売店
豊田ビル一階　TEL (551) 4587番
名駅表玄関　TEL (551) 9078番
大名古屋ビル一階　TEL (561) 5760番
中日ビル地下二階　(261) 1111－399
名駅前メルサ店　大代表 (582)－7111番

昭和47年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言人語

＊連合赤軍の浅間山荘攻防戦、日本中がテレビにくぎづけにされました。新聞はどれも連合赤軍大特集、号外まで出たことです。（ニクソン。毛沢東のお二人も連合赤軍にはかないませんでした）

＊能楽人親善ボーリング大会、三月十日、豊明ボウルにて開催。（鼓をうつような具合にはいきませんぞ）

三月の催能

三月五日 九皐会 午前九時三十分始

千才 観世 武雄
翁 伊藤次郎左衛門 三番叟 野村又三郎
面 箱 佐藤卯三郎
能 吉野天人 余語さよ子 高安 滋郎
狂 六地蔵 井上松次郎 佐藤 秀雄 井上礼之助 佐藤友彦 大野 弘之

三月十二日 観昭会 午前九時三十分始

能 葛城 鹿取 文子 西村 欽也
間 井上礼之助
能 隅田川 片山 清司 竹下 稲子 高安 滋郎
能 葵上 鷹羽 早苗 高安 滋郎
間 佐藤卯三郎
狂 薩摩守 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 秀雄

三月廿六日 中日五流能 於中日劇場

第一部 午前十時始

能 花月 金春 信高 江崎金治郎
間 野村又三郎
能 蟬丸 観世 元昭 観世 元正 宝生 弥一
間 野村万之丞
能 海人 喜多 長世 高安 滋郎
間 佐藤卯三郎
狂 お茶の水 高井 則安 山本 則直 山本 則寿

第二部 午后三時三十分始

能 安宅 豊島弥左エ門 宝生弥一
間 山本 則直 山本 則寿
能 井筒 梅若 六郎 江崎金次郎
能 邯鄲 大坪十喜雄 高安 滋郎
間 井上松次郎
狂 かくし狸 野村 万蔵 野村万之丞

狂言解説

六地蔵＝片田舎の者、地蔵堂を建立し、中に安置する六地蔵を求めに都へ上った所へ、スッパがまんまとわたりをつけました。仏師だと偽り、仲間の三人を地蔵に化けさせ三体ずつ拝ませ代金をとろうと計画します……。

薩摩守＝住吉参詣の僧、所持金なしでの道中、茶屋で一服したことから、渡し船の無賃乗船の秀句を教わりました。平家の侍＝薩摩守＝忠度（ただのり）秀句好きの神崎の渡し守との間に楽しいかけひきが始まりますが……。

お茶の水＝お茶の水を汲む様に云つけられた新発意、門前のいちゃに頼んで野中の清水へ行かせ、自分も後から出かけます。泉のほとりで若い二人の小謡の楽しいかけあいの最中、住持が様子を見にやって来ました……。

かくし狸＝太郎冠者が狸を獲ると聞た主、太郎冠者に尋ねますが、なかなかシッポをつかませません。主の帰ったあと、捕えた狸を市に売りに出かけた冠者、ぱったり主に出くわし、あわてゝかくしましたが……。

狂言大小

野村広二

二月下旬、ひるすぎにうぐいすがきて鳴く。日は射すがやや冷めたい日。この頃、例年よりも早く庭に水仙と沈丁花がひらきはじめ、部屋におく沈丁花からしきりに香がただよう。今年もおひなさまを小さく飾る。菜の花も挑もまだ咲かない。求めた桃の枝は大きな花瓶に、小さな花入れには、食事用に買ってきた菜の花を、茎が十糎ばかりあるので、これを供える。旧暦ではまだ一月の十日前後、月が頭上に高い熱田さんの梅も早く咲いた。

さて、狂言や能は、一月末山本博之氏の「卒都婆小町」をみる。昨年の「鵺小町」につづいて老女物の力演。

二月になって宝生会初会で「高砂」（禄久）のあと狂言は「戎大黒」（礼・友・松）。脇能に脇狂言のふんい気はまことにすがすがしい。観世会では喜之氏の「羽衣」。羽衣はいつみても美しい。これと前後して狂言の会が二つ。狂言の会はよい。第一回名古屋狂言、小劇場と第二回大蔵流狂言会・なごや会。なごや会は愛好者の集い、楽しかった。小劇場のことは別記（朝日）したが、もう少し書き添えたい。主催の大声会（佐藤友彦）は狂言研究の会。狂言を知るにはまず狂言を見ること。しかし狂言の知識をもつこともぜひ必要。こちらの方にもぜひ万幅の意を注いでほしい、小さくない展望をもち、息の永い計画をもって。ほかに狂言は「腰析」（卯・松・秀）「佐渡狐」（又・礼・卯）と久方ぶり「太子手鉾」（卯・秀）をみる。礼幌ではオリンピック能、金沢は新設の能楽堂・能楽文化会館落成記念能、東京は能楽協会式能に、静岡で狂言鑑賞会（三宅藤九郎ほか、木六駄に井上松次郎参加）、京都で、茂山千作喜寿記念狂言会、大阪でサンケイ観世能が催される。多彩です。催しでは、在外浮世絵展覧会（松坂屋）の清長に「石橋」与楽に「竹村定之進」が展示される。記念切手にもでた竹村定之進は「恋女房染分手綱」に登場する重の井の父であろう。鐘のなかで切腹し、道成寺を舞いながら娘の助命を主君に願う役。二月の国立小劇場の文楽はこの定之進切腹の段（織大夫・玉男）をとりあげている。

放送は「無布施経」（藤九郎）「清水」（忠一郎）「盛久」（英雄）「国栖」（信高）に、「現代音楽・合唱・花

伝書」（時分の花ほか、柴田南雄曲、FM）「能の世界・修羅と艶」（馬場あき子、文化講座五回、同）「弁慶物」（西山辰之助・横道万里雄、日本音楽道しるべ、同）をきき、「花月」（元正・謙三・万作）「千切木」（大蔵弥太郎）のほかに「風流」（三隅治雄、本田安次、教養特集二回）「日本の美・雪」（金剛流、雪ほか、放送はいづれもNHK）をみる。本は、「最近における世阿弥研究文献」（四一、一！四五、一二、西一祥、寄贈）「古い假面」（画家・江坂清作、朝日、四〇〇字欄、二、一五）「三春の三番叟」（岩波新刊紹介紙表紙画・一月）「女面」（田中豊、中央公論・歴史と人物表紙画・二月）「風流・琵琶法師のさし画」（杉本健吉、新平家物語、ちぐさの巻、小説週刊朝日）「河原乞食のつぶやき」（坂東三津五郎、阿弥号関連、潮・三月）など。

曲中の人物

西村弘敬

能や狂言は、何かの主題の人物を対照にして、其等の出来やら、物語を色々に脚色したり、或は分折して作られて居る、其人物には既存した人で特に名前を挙げて居る者も、或は全然仮定の人物などもあるが、狂言の方では名前を判然と挙げてあるものは割合に少ない様で、「朝比奈」「祐善」「通円」「業平餅」「塗師平六」其他少々で、割合に全体としては多くない様である。

謡の方では殆ど多くの曲が主題の人物があり、誰の事か判らないものは、割合に少ない様である。其内でも小野小町、在原業平、源義経、などは色々の曲の中に出で来るので試に左に列挙して見ます。

小野小町のものでは「草紙洗小町」「卒都婆小町」「関寺小町」「鸚鵡小町」「通小町」など、次に在原業平のものでは、「井筒」「雲林院」「杜若」「小塩」「右近」などがある。特に源義経に関するものには、幼少の頃から「鞍馬天狗」「橋弁慶」「鳥帽子折」「熊坂」等の色々の事件に、又長じては「正尊」「屋島」「舟弁慶」「安宅」「摂待」なとの曲に、全体として割合に多く用ひられて居る。而しで此義経に関しては、歴史の上では不明の点が多くて、鞍馬の山から脱出のいきさつ、其後兄頼朝に対面に至る迄の消息は、全く不明であって、格別に調査研究して居る人の説によれば、一般世間で語られて居る話は全く信用出来ないとの事であるが義経の戦場に於ける古今稀に見る蛮勇とも、又暴勇とも云へる豪戦で、一の谷、鵯越（ひよどりごえ）の激戦、屋島の急襲、壇の浦の舟戦、其他数々の戦場に於ける見事な戦果は、真に驚くの外なき英雄とも云ふべく、実に古今稀なる人であった。然るに晩年兄頼朝との不和を生じ、為めに悲惨な最後となった不運の人であった。頼朝と不和を生じた原因には、色々の説もあるが義経自身の素行の上にも幾分非難の点もあった様だが、梶原景時の讒言もあり、又頼朝が義経の豪勇に恐をなして遠さけんとした事、妻北条政子の不人情なども夫れ等の原因となった様に謂はれて居る。世間では此不世出の豪傑が故なく兄より退けられたるを同情しいちづに判官びいきの気風を生じたるとの事である。謡の上では史実とは或は相違する点もあるかも知れないと思はれる。

四月の予告

四月　二日　竜吟会　午前九時始
能　翁　殿島修二　千才　久田秀雄　三番叟　佐藤卯三郎　面箱　佐藤秀雄
狂　魚説法　井上礼之助　井上松次郎

四月　九日　観正会　囃子会
四月十六日　観世定式能　午前十一時始
能　景清　梅若万三郎　高安滋郎
能　雲林院　山本博之　谷田宗二朗
間　佐藤友彦
能　葵上　片山博太郎　西村欽也
間　佐藤卯三郎
狂　伊文字　井上松次郎

四月廿二日　猶飄会
能　石橋　杉田含子　高安滋郎
間　井上松次郎

四月廿三日　やるまい会　午后三時半始
狂　茶壺　野村万作　野村万之丞
狂　釣狐　野村又三郎　野村万之介
狂　千切木　野村万之丞　野村万作
井上松次郎
井上礼之助
久保克人
佐藤友彦
伊藤彰文
佐藤秀雄
野村又三郎

四月廿九日　幸友会　囃子会
四月　卅日　大槻清韻会全国大会
能　弱法師　赤間鎮雄　福玉茂十郎
間　佐藤卯三郎
能　班女　安藤時枝　渋谷きく
間　安藤時枝
能　舟弁慶　天野登茂子　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　舟ふな　野村又三郎　佐藤友彦

皮膚科　泌尿器科
大野皮膚科医院
医学博士　大野弘之　（狂言共同社同人）
診療時間　午前　10時～午後1時　午后　3時～午後6時
名古屋市西区香春町6—56
ダイヤモンドシティー4階
名西医療センター
月曜，祭日，日曜午后，休診
電話（052）531—5553

昭和47年4月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町6ノ2
井上直兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

春四月、桜便りを皮切りに、野山には一斉に春の楽しみが顔を揃えます。春の遊びは昔も今も変りません。

春の野につくづくしの首
　しほれてぐんなり

私達も公害の街を離れ、せめても春の山野にしばしの憩を求めましょう。

今月は狂言「やるまい会」が開催されます。野村又三郎氏の秘曲「**釣狐**」を中心として、野村万之丞、万作両氏の来演で盛大に催されます。どうかお出かけ下さい。

さて、四月号の発行が大幅に遅れたことから、皆様に悲しいお報せをするとになりました。幸清流小鼓方、重要無形文化財保持者、田鍋惣一郎氏は、昨秋以来病気療養中でしたが、この四月八日逐に逝去せられました。慎んで御冥福をお祈りします。

四月の催

四月　二日　竜吟会　午前九時始

能　翁　殿島修二　千才　久田秀雄
　　三番叟　佐藤卯三郎
　　面箱　佐藤秀雄
狂　魚説法　井上礼之助　井上松次郎

四月　九日　観正会　囃子会

四月十六日　観世定式能　午前十一時始

能　景清　梅若万三郎　高安滋郎
能　雲林院　山本博之　谷田宗二朗
間　佐藤友彦
能　葵上　片山博太郎　西村欽也
間　佐藤卯三郎
狂　伊文字　井上松次郎　井上礼之助　大野弘之　佐藤秀雄

四月廿二日　猶諷会

能　石橋　杉田合子　高安滋郎
間　井上松次郎

四月廿三日　やるまい会　午后三時半始

狂　茶壺　野村万作　野村万之丞　井上礼之助
狂　釣狐　野村又三郎　野村万之介　野村万作　井上松次郎　井上礼之助　久保克人
狂　千切木　野村万之丞　佐藤友彦　伊藤彰文　佐藤秀雄　野村又三郎

四月廿九日　幸友会　囃子会

四月　卅日　大槻清韻会全国大会

能　弱法師　赤間鎮雄　福玉茂十郎
間　佐藤卯三郎
能　班女　安藤時枝　渋谷きく
間　安藤時枝
能　舟弁慶　天野登茂子　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　舟ふな　野村又三郎　佐藤友彦

狂言解説

魚説法＝御布施につられ、折柄外出中の住持に代って壇家へ出かけた新発意、御経も知らず、仕方なく悴の頃浜辺に住んでいたことから、憶えている魚の名ばかりを読み込んで、なまぐさ説法が始まります。

伊文字＝清水観音に申し妻をした男お告げのお妻をさずかったのですが、妻は歌を一首読み残し消えてしまいました。『恋しくば、問うても来ませ、い。…』この続きがどうしても思いだせぬ主従、仕方なく歌関を設けます。

茶壺＝何ぞえものを捜すスッパ、立派な茶壺を背負ったまゝ寝込んでいる通行人を見つけ、一計を案じ、背負った連尺の片方に腕を入れそしらぬ顔をしています。さあ、目ざめた二人の間に争が始まりました。

釣狐＝眷族をことごとく釣り取られた一匹の老狐、猟師の伯父の伯蔵主に化け、執心の恐しさを説いて狐釣をやめさせようとし、わなまでも捨てさせたのですが……。

狂言の最高の重習、秘曲です。

千切木＝初心講の連歌の寄合に嫌われ者の太郎が顔を出しました。あまりのでしゃばり、雑言にたまりかねた一座の者は、太郎を散々に打すえて追出しました。様子を聞いてかけつけた妻に尻をたゝかれ、憶病者の太郎が仕返しに出かけます。

舟ふな＝西の宮へ遊山に出かけた主従途中、神崎の渡場で、船を呼ぶとて太郎冠者は、〝ふなや―い〟と叫びます。あれはふねじゃと云っても聞きません。主従の間にふねふな論争が始まります。

狂言大小

野村広二

三月二十七日、中日五流能の翌日にわかに春らしくなる。さくらの蕾が目立つほどふくらむ。二筋の飛行雲が白雲の間を東西に長く流れるのもいかにも春らしい。東の空にでたまるい月ももう春の月である。紅い花、黄色の花も急に咲きだす。よく鳴いたうぐいすにかわってひばりの声がしきり。ギリシヤの春のおとづれはつばめ（ギリシヤ語でケリ―ドン）、花はばらの由、「春ところどころ」（オリュンポスの雪、呉茂一）を読み直したら目に入ってきた。近ごろはひる近かく狂言の解説で来名したことのある片岡みどりさんの「西遊記」（NHKFM）をきくのが楽しみ。五流能の狂言は「かくし狸」（万蔵・万之丞）をみる。万蔵の風格が心にしみる。名古屋勢は、卯三郎、松次郎、又三郎各氏が「海人」「邯鄲」「花月」に活躍する。狂言「お茶の水」（高井則安）は期待したがみられなかった。金剛夫妻におききしたが古都のさくらはまだ蕾が固いとのことであった。北岸佑吉・山崎有一郎両氏と随分長い間テレビ能や能・狂言の普及紹介のことで話をかわした。仙田雪山氏とは京都と名古屋の能の周辺、生活の楽しさをくりかえし、はなし合う。佳き半日であった。去る十九日は前田満穂氏と金剛謹之助五十年祭記念能へ。（永謹（ひさのり）君が「道成寺」を披く。大きく、やわらかく、伝来の匂いを身辺に美しくただよわせていた。教えも教えたり、習いも習ったり、休まずこの大きな器を充実させていくであろう。同席の藤田昭彦君とや

がて名古屋でこの道成寺がみられるときは君の笛でと話して別れた。黒川能の方々が遠路はるばる来訪。その礼儀正しく熱心な観能ぶりには頭がさがった。往復とも狂言や能の話に花が咲いたが、伊吹山はまだ近かづく春を匂わせるが山肌の冷めたい感じだった。かえって、嵯氏の演じた「当麻」に因み小林秀雄氏筆の「当麻」（創元文庫）を何度も読み返す。二十七日、内藤泰二氏から、東京演能のよきたよりをきく。催しは中部二科展の北川民次氏の「ばら」と「水浴」に能のもつ奥深さと静けさを汲みとる。

放送は「松風」（武田光雲）「湯谷」（友抜喜久夫）「鞍馬天狗」（金剛巌）をきき、「藤戸」（高橋進）をみる。三宅藤九郎氏新作狂言「夢枕」（NHK放送音楽祭参加、十九日、いづれもNHK）はみそこねた。本は「名古屋芸能史、後編」（伊勢門水、小島鉄次郎付記、尾崎久弥、名古屋文化叢書、名市教委）「狂言今昔」（野村万蔵、毎日、三月上旬、四回）「箒・伊曽保鼠・夢枕の新作上演」（朝日・東京、三月上旬）など。

二月号、広瀬瑞弘氏が瑞広氏に、三月号、写楽が与楽、ちげぐさの巻がちぐさの巻になっていました。お詫びして訂正します。

伊文字

伊文字の主従は歌関を設け、通行人の協力を得て、やっと女の住居を知ることが出来た。伊勢寺は伊勢の国飯南郡東北の地で、国分尼寺の在った所である。この主従と女との結末はどうなったか、各流儀いずれの諸本もこれを伝えず、天正狂言本も同様である。あえて想像するならば、「二九十八」の狂言同様、尋ねあてたお告げの妻はとんでもない醜女で、主従逃げ帰る程度のものであろう。筋立てだけから考えれば頭初成立期にはこうした結末が演ぜられていたかもしれない。しかし現行伊文字では、通行人と主従との楽しい拍子にかゝったやりとりのあと、いかなる結末ももはや不要であることを我々に感じさせる。この後にドタバタ何らかの結末がついたなら、通行人と主従との息の合ったあのやりとりが創造する狂言の世界の一つの頂点が、崩れ去ってしまうに違いないのだ。なごり惜しげに別れて行く三者を見送りながら、我々は狂言の世界の余韻をじっくり味わうことが出来るだろう。

ところでこの曲の中で通行人の言葉に「その様に『い』でつまるならば、灯心ひきの娘でかなあろう」という科白がある。灯心はいうまでもなく灯油に浸して火をともすものであるが、この灯心を取り出すのが、藺（い）、またはいぐさ、灯心草とも呼ばれる植物である。地上一メートル位の細長い茎の中に白色の髄があって、これをひき出して灯心とするものである。この茎は別に畳表として使われる。灯心ひきはこの灯心を作る商売の者で、身分も高くはない、貧しい職人の娘を想像させると云えよう。狂言「いろは」ではいろはの文字の稽古を始めた子供が、親から口移しの「い」に対し、すかさず「灯心」と応えるほど日常的なものであったが、灯心など全く用のなくなった現代、こうした言葉の持つ面白さを観客に伝えることは、残念ながら困難と云わざるを得ない。古典の持つ宿命である。

（鈍太郎）

五月の予告

五月三日　霊泉会
能　藤戸　野村又三郎

五月五日　巽会
能　西王母　村瀬聖板　近藤久子　一柳美恵子　高安滋郎
間　太野弘之

能　小督　安田俊子　葛原正枝　植村本子　西村欽也
間　佐藤秀雄
狂　盆山　佐藤友彦　井上松次郎

五月七日　邦謡会
謡　俊寛　梅田邦久　西村欽也
間　野村又三郎
能　熊野　片山慶次郎　高安滋郎
狂　杭か人か　佐藤卯三郎　井上礼之助

五月十三日　一謡会　囃子会

五月廿一日　茲水会
能　富士太鼓　水野あや子　高安滋郎
間　佐藤秀雄
半能　屋島　森川みどり　四村欽也
狂　清水　井上礼之助　井上松次郎

五月廿八日　鳳鳴会　囃子会

五月廿九日　名古屋狂言小劇場
午后六時半始　於　名演会館
狂　水掛聟　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
狂　昆布売　野村又三郎　井上礼之助
狂　三人片輪　佐藤友彦　大野弘之　佐藤秀雄　鷲見政行

メモ欄

徳田税務会計事務所　名古屋市守山区吉根(キツコ)笹ケ根 557
税理士　徳田文夫　電話 052－736－2934

狂言

昭和47年5月1日発行
発行所
名古屋市中区栄門前町6ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

横井正一さんの生還でよび起された戦後の記録、この五月十五日にはその戦後の記録を刻明に塗り込めた沖縄がいよ〳〵本土に復帰します。戦後は終ったと云われてはや数年、真の戦後のピリオドにしたいものです。

四月には田鍋惣一郎氏の計報に接しましたが、今月は狂言界の朗報をお報せします。

大蔵流山本則寿氏が此度故山本東次郎氏の跡を襲ぎ、東次郎襲名被露の「山本会」が、十三日に東京水道橋能楽堂で開催される由。喜多実氏の「翁」に東次郎「三番叟」、狂言は秘曲「獅子聟」（東次郎）という豪華な番組です。狂言界の為、心から喜びたいと思います。

五月の催能

五月 三日 壺泉会
能 藤戸　野村又三郎

五月 五日 巽会
能 西王母　村瀬聖板　近藤久子　柳美恵子　高安滋郎
間 井上礼之助

能 小督　安田俊子　葛原正枝　植村本子　西村欽也
間 佐藤秀雄
狂 盆山　佐藤友彦　井上松次郎

五月 七日 邦謡会
謡 俊寛　梅田邦久　西村欽也
間 野村又三郎
能 熊野　片山慶次郎　高安滋郎
狂 杭か人か　佐藤卯三郎　井上礼之助

五月十三日 一謡会　囃子会

五月廿一日 茲水会
能 富士太鼓　水野あや子　高安滋郎
間 佐藤秀雄
半能 屋島　森川みどり　四村欽也
狂 清水　井上礼之助　井上松次郎

五月廿八日 鳳鳴会　囃子会

五月廿九日 名古屋狂言小劇場
午后六時半始　於名演会館
狂 水掛聟　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
狂 昆布売　野村又三郎　井上礼之助
狂 三人片輪　佐藤友彦　大野弘之　佐藤秀雄　鷲見政行

狂言解説

盆山＝流行の盆山を盗まんと知人の家に忍び入った男、家人に見つかりあわてて盆山の陰に隠れました。見つけた家人も知人であるを見抜き、適当になぶって帰そうとします……。

杭か人か＝日頃空腕立てをする冠者に留守番を申付け、主は外出しました。留守を預かる冠者は日の暮れた家の周囲をおそる〳〵見廻る内、闇の中に一つの影を見つけました。杭のようでもあり、人のようでもあり……。

清水＝野中の清水で、水を汲んで来る様云付けられた冠者、行きもしないで鬼が出て逃げ帰ったと主に報告します。大事の水桶を取り返さんと様子を見に出かけた主に、あわてゝ冠者は鬼に化け、話のつじつまを合せると同時に日頃の不満を晴らさんと……。

狂言大小

野村広一

四月上旬、桜の咲く前後は雨や風が花をいためつけるような日が続く。そして急に若葉が太陽の光に照りはえる暖かさがやってきた。もみぢ・赤目・ざくろ・くすの木の赤・薄茶や緑が目にしみる。この頃、金春能三つの招待をうける。二日三春会、東海ともつながりの深かった本田秀男氏の七回忌追善能。五日伊勢神宮春季奉納能。十六日は奈良金春能。どれも盛会の由。名古屋では初旬笛の金森準三・小島鉄次郎両氏の追善会のあと中旬に、すでに葉桜の能楽堂で「景清」（万三郎）をみる。激せず、写実にすぎず、古格を固く守るなかに、孤独にたえ、親子の別れを惜む。飾らず、巧まず、そのよさを示す演能振り、全体の調和もあり地味ながら味わいの深さが心に痛い、東京では新観世能楽堂が竣工、舞台披きの祝賀日加寿能が十九日から催される。このことは二十一日の増田正造氏・能評（東京新聞）にくわしい。

さて、四月は悲事にふれねばならぬ。それは小鼓・田鍋惣一郎氏の他界です。食道ガンで入院・手術・養生のこと半年であったが、その間も元気な声を電話できくことができ、退院を間近かに控えて、桜の散るを待たずにわかに亡くなられた。八日、六十五才。あの上手にシテを舞わせていく円転滑脱なわざの舞台はこれから真の花を咲かせることができたのに惜まれてならない。卒都婆小町を打つ姿もついにみず仕舞となった。長い間、むつかしい渉外的な仕事を受け持たれ、進んで東奔西走、いつも明るくにこやかな顔に和服姿で応対される。伝統にモダンな面を添え、柔軟性十分、清濁併せ呑み展望の広いよき仕事ぶりだった。齢をかすに十年。たとえ舞台に立たずとも、能界の万事のための存命が望まれてならなかった。青い枝豆でビールが大好物、興至ればしゃれた江戸の唄がでた。何度にぎやかな街を楽しく廻ったことか。しかも時間がくるとかならず帰宅、次の日の勤めに支障を来たさない心がけがあった。昨年六月父上・故田鍋惣太郎氏の米寿記念能後の三、四の有志との会食の一夜が痛飲乱舞の最後となった。放送は「宗論」（万作・万之丞）「千寿」（喜多長世・節世）「西行桜」（高橋進）をきき、「美の世界・アメリカの日本美術」（三井寺のフエロサの墓）「伝統の美・鏡獅子」

（尾上梅幸）「壬生狂言」（二十一日ニュース、いづれもNHK）をみる。本「狂言・簡明なユーモア」（小林責、伝統と現代(3)、淡交三月）「中世歌謡と民衆思想・遊狂」（馬場アキ子伝統と現代十五号、歌謡特集）「八橋の杜若」（グラビヤ東海好風、国文学五月、万葉集特集）「鉢木とデカメロン」（平川祐弘、視点欄、毎日四・八）など。

名古屋狂言小劇場
―第二回公演にあたって―

二月発足したこの小劇場が今月二十九日に第二回公演を行う。「小劇場」ばやりの昨今であり、さらに能楽堂を離れて新劇関係を中心とする名演会館を会場とすることもあって、何か狂言の新しい実験的な性格を持つのではないかと期待される向きには、いささかあてがはずれるかもしれない。

名古屋狂言小劇場は、文字通り狂言を小劇場で演ずる会である。狂言を狂言として演ずることを出発点とし、同時に、それが最終目的でもあると云える。時には実験的な企画が持たれるかもしれない。しかしながらそれは、あくまで狂言を古典演劇として高めるための触媒的な仮きをする限りにおいて行われても、それ自体を目的とするものではあり得ない。六百年の歴史を生き抜いて来た狂言は、そのあらゆる時代に訴える真実と、それを支える力とを兼ね備えていたからこそ生き残り得たのである。今日、すでに伝統演劇として一定の評価が定まった感のある狂言だがその評価の上にあぐらをかくことなく、さらに、古典演劇として高めると同時に、現代という時代とどう対決するかその姿勢が真に問われねばならない。伝統とはその時代々々が注ぎ込んだ汗の結晶である。現代の汗をどの様にして我々はこの狂言に注ぎ込み練り上げたらよいのか、六百年を生き抜いた狂言の根元はどこにあるのか、現代の汗をこの根元に結晶化させること、そこに狂言と現代の接点がある。

不器用な我々には、狂言を狂言として精一杯演ずる中で、この問題を問うて行がんとするものである。

（大声会同人）

熱田神宮大祭奉納能　（入場随意）
昭和四十七年六月五日（月）

第一部　（午前十一時始）

（喜）嚏子高砂　長田　曉　吉田定男　鬼頭喜太郎　田鍋洋一　藤田昭彦
（観）連吟　鵜之段　増田一雄　高野　瀬透
（観）仕舞　杜若キリ　高木美智子
仕舞　班女アト　服部　紗枝
狂言　御冷し　佐藤卯三郎　井上松次郎
仕舞　野守　辰巳　孝
吉田　俊彦
（宝）能　雲林院　高安　滋郎　寛鉱一　山口義郎　飯富　雅介　後藤孝一郎　鹿取希世
佐藤　秀雄
間
附祝言

第二部　（午后二時始）

（観）嚏子砧　柴田初太郎　吉田定男　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
仕舞（剛）田村　山田仁三郎
仕舞（春）杜若　本田　光洋
仕舞（観）加茂　水藤　元三
巻絹　柴田　牧武
狂言　寝音曲　野村又三郎　井上礼之助
佐藤　太俊
（観）能　三輪　西村　欽也　河村総一郎　柳原富司忠　野崎太郎　寛三男
間　大野　弘之
附祝言

（終了　五時頃）

六月の予告

六月　四日　雄飄会
能　葵上　下田　雄三　高安　滋郎
間　井上松次郎
六月　五日　熱田神宮大祭奉納能
六月　十日　和調会　嚏子会
六月十一日　青陽会
能　高砂　久田　秀雄　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能　桜川　河村　鉦二　西村　欽也
能　舟弁慶　浦田　保利　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂　魚説法　井上礼之助　井上松次郎
六月十八日　観世会
能　敦盛　観世　寿夫　西村　欽也
間　井上礼之助
能　班女　大西　信久　久保田千三郎
間　佐藤　秀雄　佐藤　友彦
能　天鼓　橋岡　久共　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂　花盗人　佐藤卯三郎　井上松次郎
六月廿五日　宝生定式能
能　巴　辰巳　孝　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　隅田川　宝生　英雄　高安　滋郎
狂　名取川　井上礼之助　佐藤　友彦

味噌
酒　商
たまり
食料品
むとう食品店
名古屋市昭和区川名本町1の10
電話　(762)　2166番

狂言

昭和47年6月1日発行
発行所
名古屋市中区栄門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481) 7445

狂言人語

※重要無形文化財保持者として、今回あらたに四十五名が指定を受け、日本能楽会会員に加えられた。当地からも高安流脇方・西村欽也、観世流太鼓方鬼頭喜太郎の両氏が指定を受けた。心からお喜び申し上げるとともに、今後の御活躍を期待したい。

※かねて市内中区古沢町に建設中の、名古屋市民会館（地下二階、地上六階塔屋一階建）も愈々十月一日、完成記念式典が催され柿落（とけらおとし）には、観世元正御宗家の翁が上演される。当日の配役は左記の通りである。

翁　観世　元正
三番叟　面箱　井上松次郎
和泉　保之
千歳　片山博太郎
安福　春雄
幸　幸義太郎
円次郎
田鍋　洋一　藤田六郎兵衛

会館は大ホール二、三一一席。中ホール、一、一五八席、其他リハーサル室会議室等がある。

後見　柴田初太郎
大槻　秀夫
地謡　佐藤　太俊
河村　鉦二
久田　秀雄
林　甲子生
柴田
藤井　徳三
武田　太
泉　嘉夫
牧武
加志

暑中御見舞

昭和四十七年盛夏

狂言共同社
名古屋和泉会

※恒例の和泉会が別掲の如く、今回は市民会館開館記念行事の一環として十月十日、中ホールにて催される。人間国宝野村万蔵師。大蔵流家元大蔵弥太郎師。和泉流家元和泉保之師。大蔵流善竹忠一郎師を迎え、盛大に催される。御期待下さい。

六、七、八月の催能

六月　四日　雄飄会
能　葵　上　下田　雄三　高安　滋郎
間　井上松次郎

六月　五日　熱田神宮大祭奉納能
第一部　午前十一時始
能　雲林院　吉田　俊彦　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂　御冷し　佐藤卯三郎　井上松次郎
第二部　午后二時始
能　三輪　佐藤　太俊　西村　欽也
間　大野　弘之
狂　寝音曲　野村又三郎　井上礼之助

六月　十日　和調会　囃子会
六月十一日　青陽会
能　高砂　久田　秀雄　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能　桜川　河村　鉦二　西村　欽也
能　舟弁慶　浦田　保利　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂　魚説法　井上礼之助　井上松次郎

六月十八日　観世会
能　敦盛　観世　寿夫　西村　欽也
四　井上礼之助
能　班女　大西　信久　久保田千三郎
間　佐藤　友彦
能　天鼓　橋岡　久共　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂　花盗人　佐藤卯三郎　井上松次郎

六月廿五日　宝生定式能
能　巴　辰巳　孝　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
囃　隅田川　宝生　英雄　高安　滋郎
狂　名取川　井上礼之助　佐藤　友彦

七月　九日　朝日狂言会　午后二時始
合　柿　和泉　保之　佐藤　友彦
大野　弘之
宗　論　茂山　千作　茂山千五郎
茂山　正義
石　神　井上礼之助　野村又三郎　大野　弘之
縄ない　茂山千五郎　茂山　正義
二人袴　井上松次郎　佐藤卯三郎
佐藤　秀雄　井上礼之助

七月十六日　観瀬会　囃子会
八月　五日　薪能　午后五時卅分始
能　声　刈　衣斐　正宜　西村　欽也
間　佐藤　友彦
能　鉄輪　久田　秀雄　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂　太刀奪　井上松次郎　佐藤　友彦
井上礼之助

お茶と水

西村弘敬

狂言に清水というのがある。之れは茶道の喈の深い人が、お茶に用ふるため、名水を求めるのに、召使いの太郎冠者に野中の清水を汲みに遣はそうとすると、太郎冠者は行くのがいやなので、何とか誤間化して行くをやめようと考へ、七つ（午后四時）過ぎると鬼が出るので、行く事はならぬと云ふ。主人は何がなんでも行けと強く言い、自分も見に行くというので、太郎冠者は鬼の面をつけて主人をおどかしたが遂にばけの皮がはげて失敗したといふ筋である。

そこでお茶と水との関連はどんなものかといふに、茶道に深く関心のある人は、水の適否がやかましくて中々にむつかしい。単に水といっても、之れに含まれてある有機物。無機物によって、大変な違いがある。蒸溜水の如き至極純粋の水は呑んでも、誠に味が無くて所謂無味であるが、之れに反して山地の岩の間などから湧き出る泉の水には、自然に融け込んで居る色々の物

質を含んで居て、呑めば何となく美味を感ずる事もある。又平地の井戸でも呑んで誠に美味の水もある。世の中には舌の感覚の頗る鋭敏な人もあって、同じ水を使っても、薬鑵(やかん)で沸かしたのと味が違ふと云ふ位に、呑みわける鋭敏な人もある。狂言の清水の主人が茶には野中の清水、醒が井の水が最上の由と云い、よって野中の清水を汲みにやるのであるが、主の言葉の野中の清水醒ケ井の水といふ、其の醒ケ井とはどこをさしての事か半然として居ないが、京都の市中の堀川の東通りに「醒ケ井通」といふがあるが、そこに井戸があったかどうか判らない。又一方東海道線米原駅の東隣りに醒ケ井と申す駅がある。之れは中山道の宿で、狂言の小唄の海道下りの中に「仮寝の夢もやがて醒が井番場とふけば」と歌ってあるので、此醒ケ井の宿は昔から知られて居て、茲に「醒ケ井の流れ井戸」と云ふ名水がある。之れは鉄道の駅より東へ約五百米ばかりの所で、中山道の街道沿ひで南側の小高い山の麓で、山側も道側も石垣にて囲まれ、広さは巾十米程の長方形で、深さは凡て八十センチ位石垣の間や底の砂利の間から、こんこんと湧き出づる玉の様な水で、呑んでも美味であるばかりでなく、夏は冷たく誠に手を浸せば三十秒も経ぬ間に痛くなる程で、冬は暖かく湯気が一面にぼうぼうと立昇る程で、其湧水の量も頗る多くて接続せる溝を滔々と川の様に流れて居る、依て醒ケ井の流れ井戸といわれ、其清冽なる事比類のない名水である。此水ならば茶人でも喜ぶ事疑いなしと考へられ、狂言にある醒ケ井の水とは此事ではあるまいかと思はれる。

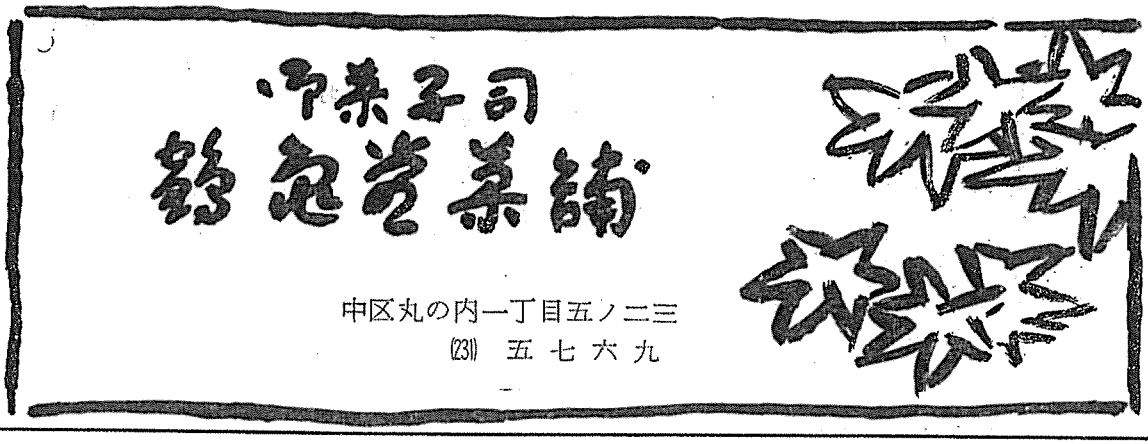
狂言大小

野村広二

近か頃は、家に閉じこもって、ラジオをきき、テレビをみ、本を読んだり庭の草をむしることが多い。小憩を求めて、毎年M教授からいただく飛び切り上等の新茶をいれては、心をしづませ若やいだ気を取り戻す。そんな折、今年の五月までの学芸、芸能物故者のうちに古典学者久保勉(まさる)氏の名前をみつける。久保さん訳の岩波文庫本、プラトンの、「ソクラテスの弁明」をひらくと、大学一年で故須貝司教(当時司祭)からおそわったギリシャ語で沢山の書き入れがしてある。

「詩人が詩作するのは知恵によるのではなくて、寧ろ予言者や神巫のように一種の自然的素質と、神来とによる云々」「賢明なるは独り神のみであろう」や「人智の価値は僅少、若くは空無である」のことばのあたりはなつかしい。多感な青年時代であった。六月二日、江戸文芸と浮世絵の研究家、尾崎久弥氏逝去。朝日狂言会や名匠鑑賞能にあの超然としてしかも人なつこい和服姿をみかけたが、おそばにいるだけでも心なごんだ。能楽愛好者が櫛の歯の抜けるようになくなられるが大層さみしい。五年以上も前、ご夫妻お祝の席で、紅い短冊にご夫婦連名でしたためていただいたのが「月の暈(かさ)無理心中のある世かな」。最近後編のでた「名古屋芸能史」(名古屋市文化財叢書、前・後編)で能楽関係の三・四の項を拝読したのが最後となった。

さて、この頃読んだ本の中で、一冊の本・「善意の人びと」(毛利孝一・医学博士)にふれなくてはなるまい。この本はわたくしの中学の大先輩で、高木市之助博士や河村丘造氏の主治医であるM医師の二度の外遊の紀行と視察の文章。最初の外遊のとき、バンコクからカラチへ向う上空で、視界ほとんどゼロの密雲のなかを飛行。しきりに大きく上下する機体は何十階かをエレベーターで一気に落されるよう。不安はつのる。このときM医師はふと窓外に自分の乗る飛行機の今飛ぶ姿を想像し、もう一人の自分がそれをみている立場にあるような想念を持たれた。と、動揺もなく進行する機影、しづかにすわる自分の姿をみつけだす。不安は消える。また不安。そしてこれを何度か繰り返えすうち無事雲中飛行から青空の下にでられた由。もう十五年も前のこと。これはまさに離見の見でございますね、すばらしいと話すと、そのときM医師はおだやかな顔でそういうものでしょうかとしづかに笑っておられた。これをひいて離見の見を話す機会を迎えた。それはM医師と親しい二組のドイツ人教師夫妻に能と狂言をみてもらう五月上旬のこと。梅田邦久氏の好意で邦謡会の「俊寛」(同氏)と「熊野」(片山慶次郎)に狂言は「杭か人か」(卯、礼)を。文学に理解のふかいH氏、N氏両夫妻の心をいたくゆさぶったらしい。ギリシャ悲劇の構成、アリストテレスの三一致の法則にあう「俊寛」、悲しくて美しい「熊野」。高尚でむつかしい質問が感歎のことばを縫ってたてつづけにM医師の通訳で放たれる。ときには美しい日本語で。M医師は未熟な日本語を巧みにときほぐして、お客様に伝えてくださる。假にワッケンローデルの「真情披れき」や「芸術幻想」、アイフェンドルフの「タウゲニヒツ」ほかの味わい



を持ちだし、瞑想、深さ、明るさ、固さ、細ち、悲しさ、憂愁などを語ってみた。ゲーテの「ファウスト」の話もでた。そのうち能楽の特殊性と普遍性をどうやったらわかってもらえるか、画者に共通する表現は何かとあらためて考えた。幽玄、おかしさと別の言い廻し方でこの二つをと。能ならば、結晶の固い美しさ、無心の境地（谷川徹三）おおらかさとうらうらかさ（福原麟太郎）地獄の思想（梅原猛）変身の美学（山崎正和）死から生をみ、老いの時点から若さと人生をふりかえる、極限状態で人間の弱さと悲しさを描く（増田正造）ということばでは。儀式と人間の闘争、深淵、清朗、自然への愛情幸福がみ出せる日本の美しいドラマであろう。それでは日本の喜劇である。狂言は何といったらよいであろうか、このときM医師のあの想念、離見の見を語ろうとして、その機会がなかったが、次回の観能のときを期待することにした。

能楽界の上半期は今年も多事、本の出版。複刻も多彩。狂言界は、茂山千作氏が昨年十一月の京都市文化功労者決定についで釣狐上演、大蔵流山本則寿氏の四世東次郎襲名、新作狂言の発表に加えて、名古屋では、第二回大蔵狂言会、なごや会、やるまい会に万之丞、万作、万之介三兄弟の来名、名古屋狂言小劇場の初公演、卯三郎、又三郎両氏の二度の三番叟と話題はにぎやか。腰祈（卯、松、、秀）梟山伏（卯、弘、友）素袍落（松、秀、礼）三人片輪（友、弘、秀、鷲見）鈍太郎（又、礼、友）など秀逸。又三郎氏はやるまい会で六度目の釣狐を演じた。狐の姿をかりた人間の心がはげしくゆれ動く緩急をやわらかく描きだしながら、その周辺に自然（風景）を感じさせない演じ方で、それは二人の男がまた男女が相対する、色濃く塗った油絵をみるようで、不思議な舞台であった。今度あたらしく日本能楽会々員に、西村欽「鞍馬天狗」（英雄）「井杭」（野村武司、藤九郎、方蔵）「武悪」（万之丞）をみる。本は「能、捨心の芸術」（桜馬道雄、朝日、佳書）「新作狂言箒と伊曽保鼠」、（芸術新潮、五月）「名宝文化劇場閉館」（朝日、五、六、終戦直後能楽上演）「天皇の世紀さし画、壬生狂言」、（上村松篁、朝日、一四六六―七一）など。なお武蔵女子大より能楽資料センター設立のお知らせをいただく。顧問、土岐善麿、古川久、運営委員安藤常次郎、増田正造、小林責の諸氏。将来同大学、東洋文化研究所の一環となる由。その発足をお祝し、今後の活動を期待したい。

七月は朝日狂言会、八月

大衆能

昭和四十七年九月三日（日）午后二時始
於　愛　短　文　化　講　堂

能　組

（野多 舞囃子）**高砂**　ツレ 妻 鬼頭　嘉男　シテ 清益 内藤　泰二　シテ 和島富太郎　大鼓 河村総一郎　小鼓 後藤孝一郎　笛 藤田　昭彦　大鼓 野崎　太郎

（宝生 能）**清経**　ワキ 平重盛郎三郎 高安　滋郎　大鼓 吉田　定男　小鼓 田鍋　洋一　笛 鬼頭　季信　仕舞（金剛）弱法師　仕舞（金春）井筒　シテ 大塚　一二　シテ 前田　茂穂

（観世 舞囃子 宝生）**船弁慶**　シテ 渡辺　三郎　大鼓 覚　鉱一　小鼓 後藤孝一郎　笛 藤田六郎兵衛　大鼓 鬼頭　喜太郎　仕舞（観世）蟬丸　仕舞（観世）野守　シテ 杉村　竹翠　シテ 柴田　収武

（観世 能）**松風**　シテ 村雨 橘　保向　シテ 松風 梅田　邦久　ワキ 旅僧 高安　滋郎　大鼓 河村総一郎　小鼓 福井啓次郎　笛 藤田　昭彦　間　所ノ者 大野　弘之

（観世 舞囃子 狂言 和泉）**三人片輪**　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助　佐藤　友彦

（観世 舞囃子）**融**　シテ 男女 長田　驍　シテ 片山慶次郎　大鼓 吉田　定男　小鼓 福井　良久　笛 藤田六郎兵衛　大鼓 鬼頭　八郎

（喜多 能）**黒塚**　ワキ 山伏 西村　欽也　ワキツレ 山伏 高安　勝久　従者 佐藤卯三郎　大鼓 覚　鉱一　小鼓 柳原冨司忠　笛 覚　助川　竜夫　三男

附　祝　言

会　費　指定席　一、三〇〇円　普通席　一、〇〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　各プレーガイド

祝言性の濃いものとされている。二人袴はその代表的なものである。

聟入り（結婚後初めて聟が舅の許へ挨拶に行くこと、今日のそれとは異なる）の晴れの日に、肝心の長袴が一具しかない。同道した聟とその親は、仕方なく替る〳〵に座敷に通るのだが、結局二人一緒に出ねばならぬ破目となり、思案の挙句一具の袴を二つに裂き互いに前だけの袴をあてて舅の前にかしこまる。

成程、後のない袴でも正面からだけ見れば一分のすきもない立派な晴装束である。前だけの袴をあてて何くわぬ顔でかしこまる親子、結局は破綻する他ない結末がわかり切っていながら、見るものは大いに笑わせられる。

結局親子は袴の後を舅と相舞の内に見つけられ、逃げ入ることになるのだが、古来から演出に異同が見られる。〳〵後にはむこのまへを太郎くわじゃとり、しうとはおやのまへヲとって、一ベンまわり、笛ニテ留ル也。

（和泉流・天理本）

〳〵三人まふて、うしろを見付、はかまのまへを取て、むこ殿のはかまを太郎くわじゃみよと云、下人、おやごのはかまも是でござると云て、まへをとりひつはる、むこ、おや、ざれ事をなめされそというて、しゃぎりにてとむる、ひつととびのく時、しうとも下人もはかまをはなひてとびのく也。

（大蔵流・虎明本）

和泉、大蔵両流とも古くは袴の後を見つけられてからは、筋立てとは関係なくその祝言性の故にシャギリ留めと聟狂言の楽しさは、花聟の初々しい聟振りと、その世間知らずの愚直さがまき起す笑いにあると云えるのだが、聟入りを取り扱っていることから特に祝言性の濃いものとされている。二人袴はその代表的なものである。

二人袴

は薪能、九月はじめに大衆能。よき狂言と能をみて来るべき長雨と炎暑に耐えよう。

放送は、「山姥」（六郎）「阿漕」（寿夫）「船渡聟」（保之）をきき、

されていたのであるが、後期台本になると、劇的展開の不自然さからやはり「逃げ入り」の演出に統一されることになる。

／此間ニ（舞の内）シウト太ら二人ノ後ヲ見付テ笑ウ、舅ハ親ノ袴、太らハシテノ袴ノスソヲ持て、シャキリニテ四人トモハシリコキニテ小廻シテ、三人一同ニ／イヤアト止メ入ルナリ。又左ノ通ニモスル、シウト太ら二人笑ト／あれハ何とした袴しや、二人驚テ／アゝ是ハ見付られた／扨ゝ面目もこさらぬト云、二人袴ニテ顔ヲカクシテニケ入事も有（以下中略）又左ノ通ニ云事モ有、二人袴ヲ前ニ当テ出ル時シウトニ人ノ後ヲ見テ、ワキサへ立テ太らヲ呼テ／あれを見よ、二人笑、あきれもせぬ事しやト云、太〳〵シカ〳〵／あの様な者にははちをあたゑふト云太〳〵シカ〳〵ト云テ下ニヰテ、盃を出せト云、是ヨリ同断也。

（和泉流・型付本）

〳〵太郎冠者立て、申あのなりを御らうせられませう　舅〳〵さても〳〵恥知らずよ〳〵　親〳〵面目もない、悴ちやつとこい〳〵　二人二ケ入

（和泉流・波形本）

以下大蔵流虎寛本、和泉流雲形本ともすべて「逃げ入り」に統一されており、雲形本後注に「古書ノ留ハシャギリナリ、古風ナル事也」と書きのこしているのである。

ところで小道具としての袴の取扱いのうまさには思はず感心させられるがこの処理の仕方にも様々な工夫があった様である。

最古の台本である天正狂言本「はかまさきによれば、袴を持たぬのを舅として扱っており、太郎冠者と舅が替る〳〵にはいた後、やはり二つに裂いて前だけをあて、結局舞う段になって後を見られぬよう二人が背中合せになって舞う所を、不審に思った聟が二人を押分けてこれを見つける、舅は恥じて逃げ入り、聟は手を打って笑う、というものである。

又江戸時代刊本である狂言記「相合袴」では、聟、親二人が一つの袴に片方づつ足を入れて出るのを見た舅が、聟の恥は舅の恥と、これも太郎冠者と同様の相合袴となって、双方めでたく連舞に舞納めるという筋立てである。

大蔵、和泉両流の諸台本とも、いずれも袴の取扱い方は今日と大差はないが、これに統一されるまでにはやはり長い歴史の中では天正本、狂言記にあらわれた様な、様々な趣向がこゝろみられたことであろうと推測される。

（鈍太郎）

九月の予告

九月　三日　大衆能
九月　十日　観世会　素謡会
九月十七日　藤門会　素謡会
九月十五日　鍵雲会
能　大原御幸　風岡勇二　西村欽也
間　佐藤卯三郎
能　望月　内藤泰二　西村弘敬
間　井上松次郎
狂　痩松　井上礼之助　大野弘之
九月廿四日　金春会
能　田村　林鉄郎
松本武　西村欽也
間　佐藤友彦
お冷し　井上松次郎　井上礼之助

昭和四十七年度名古屋市民芸術祭
名古屋市民会館開館記念

第十二回

和泉会

日時　昭和四十七年十月十日　午后一時三十分始
場所　名古屋市民会館・中ホール

番組

高砂　内藤泰二　福井啓次郎　寛鉱一
地謡　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　竹腰勝一　衣正嘉宜　鬼頭嘉男　稲川寿一

末広かり　和泉保之　野村又三郎　井上祐一
空腕　野村万蔵　野村又三郎
金岡　井上松次郎　井上礼之助
地謡　佐藤友彦　和泉保之　井上祐一　大野弘之

月見座頭　大蔵弥太郎　善竹忠一郎
首引　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　佐藤友彦　大野弘之　井上祐一　鷺政義　井上見次郎　今枝鴻治　歌村行助　石井豊二郎　井上喜良　井上良治　井上樹弘

（終了予定　五時頃）

主催　名古屋市教育委員会　名古屋和泉会　名古屋市

後援　社団法人名古屋能楽会　能楽協会名古屋支部　名古屋狂言共同社

会費　指定席　一〇〇〇円　自由席　七〇〇円　五〇〇円
取扱所　各出演楽師宅。松坂屋オリエンタル中村　丸栄　毎日ビル　名鉄各プレイガイド　アサヒサービスコーナー（朝日新聞名古屋本社玄関内）
事務所　中区裏門前町五―二　井上方　電話(0)一四三〇

昭和47年9月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

＊ミュンヘンオリンピック開催。史上最高の参加国と参加人数を集めて華やかに開幕されました。コンピューターオリンピックとまで云われる科学万能の大会、日本選手団にも大きな期待がよせられています。

＊このオリンピックには芸術展示能楽団として宝生九郎氏を団長とする能楽団が渡米している。狂言方からは和泉保之、三宅右近、和田裕の三氏が参加英国、スイスに続いてミュンヘンでの連続公演が予定されている。曲目は、隅田川・柿山伏・羽衣・清経・棒縛・綾鼓。活躍を期待したい。

＊去る七月七日、東京の大蔵、和泉両流の若手狂言師が集まり「狂言　新の会」の第一回公演が開催され、大いに話題になっている。山本則直、三宅右近、善竹十郎、野村万之介の四氏。

それぞれ流派、芸系の異なる若手の四氏が連帯感と、よい意味での競争意識を持ちながら、芸の研究発表の場として、今後の会の発展が大いに期待されています。

九月の催能

九月　三日　大衆能
九月　十日　観世会　素謡会
九月十七日　藤門会　素謡会
九月十五日　雛雲会
能　大原御幸　風岡　勇二　西村　欽也
間　佐藤卯三郎
能　望月　内藤　泰二　西村　弘敬
間　井上松次郎
狂　痩松　井上礼之助　大野　弘之
九月廿四日　金春会
能　田村　林　鉄郎
松本　武　西村　欽也
間　佐藤　友彦
狂　お冷し　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

三人片輪＝ある有徳人が片輪者を召し抱えると聞いた食いつめ者三人、それぞれ盲目、いざり、おしに化けてまんまと抱えられました。やがて主人の留守に早速正体を現わし、賑やかな酒宴が始まります……。

痩松＝例によって間抜けな山賊、獲物を狙う所へ、女の一人旅を見つけます。今日こそは取り逃すはずのない相手と思ったのですが……。

痩松とは山賊の合言葉で不幸せなこと（獲物が少ないこと）、逆に幸せの多いことを肥松と云います。

お冷し＝清水へ遊山に出かけた主従二人、滝の水を汲むとて、ふと主の口から出た「お冷しをむすぶ」と云う言葉。平素の不風流な主のこと、太郎冠者でなくともからかいたくなるものです。また〈主従の間にお冷し論争が始まります。

狂言大小

野村広一

七月上旬赤トンボを庭にみつける。白の百日紅の花も開く。こおろぎがなきはじめたのは八月の中旬であった。下旬になってにわかに秋の気配を感ずる。しかし短かい命の芙蓉の花がつやつやしくみえる暑い日中が続く。七月の朝日狂言会は千作、千五郎両氏の、「宗論」がまことに印象的。なぜか、この二人の僧とは対照的な、かつての名映画・女だけの都に登場したルイ・ジューベが扮する修道僧のおもかげがしきりに思い出されてならなかった。またテレビで「釣狐」（野村万作・万之丞、芸能百選、NHK、以下おなじ）が、はじめて上演されたのも七月である。「花子」もやがてとりあげられるであろう。また八月二十六日の夜、ミュンヘン、オリンピックの開会式をみたが、その明るく、軽妙で、のどか、最後（アポローンの神託）の重々しい風景に狂言の味と相通うものをみつけて心が広々とした。さて、七回目を迎えてすっかり夏の行事の座を占めた薪能も多くの人をあつめて盛んな催し。おそらく各地のにひけはとるまい。ほかに、狂言新の会の誕生、新作能「女と影」が原作者のクローデルの研究学会に招待上演のため渡仏についで、ミュンヘン・オリンピック芸術展示に能・狂言が参加、野村万作・四郎両氏の渡米など、例年の催しに加えて今年も多事。なお、梅若猶義・野口伝之輔両氏に、名古屋では平曲採譜に心血をそそがれ、その前後にレコードで那須与一ほか（三曲）が市販流布された藤井制心氏が他界されました。ご冥福をお祈りしたい。

放送は、「玄象」（大西信久）「土蜘」（野村蘭作）「松風」（元正ほか）「蝉丸」（博太郎・慶次郎・元三郎）「邦楽鑑賞・地唄②・珠取」（富山清琴）をきき、「市民大学講座・演劇と風土①」（六平太の頼政）「文化特集・能の表情」（増田正造・喜多実ほか）をみる。本は、「世阿弥」（北川忠彦、中公新書・二九二）「遊楽習道風見と遊楽芸風五位・岐陽万秀と世阿弥」（西一祥、日大語文三七号、寄贈）「鷺流のふるさと磯島」（小林貢、歴史と文学八月、中央公論社）「能への郷愁」（池内たかし、季刊芸術最新刊・号未詳、未見）「ことば」（お能の呼び方ほか、円地文子、東京七月上旬）など。

名古屋の秋は大衆能からはじまる。期待したい。

追善と法楽

西村弘敬

世間では先考や、先輩又は恩師などの為に、色々の追善といふ事が行はれる。追善といふのは仏事とか、神事とか、若くは故人の関心の有った事柄などの行事を催して、故人の冥福を祈り悦んで貰ふのが目的である。其節に色々の芸能やら、或は故人の関係深い諸会合などを催して、故人の霊を慰め、悦ばせる事は追善の法楽といふのである。従って此法楽も催主にて一切の費用を負担して奇麗に行ふべきが本意であるが、出演者其他の雑費が多額になり、催主にて負担出来難い場合も生じ止むなく入場料若くは観覧料を徴収する場合も出来る。此場合は追善興行といふべきで、之も時として致し方ない場合もあるが、中には追善に名を籍りて興行的に催し、収益を計らんとする輩もあった。之れなどは誠に寒心の至りである。

第十二回和泉会に寄せて

—月見座頭への期待—

市民会館開館記念行事の一環として開催される第十二回和泉会は、豪華な番組、多彩な出演者等、会場と共に大きな期待が寄せられている。

和泉会は七月の朝日狂言会が和泉、大蔵両流の競演の形を取るに対し、多く和泉流だけで充実した番組が組まれて来たが、今回は大蔵流宗家弥太郎氏と善竹忠一郎氏の来演を得て「月見座頭」が予定されている。

本曲は大蔵派だけにある名曲であり当地での上演はめずらしいものである下京に住む座頭が月見に出かける。勿論月が見えるわけではなく、虫の音だけでも楽しもうというのだが、そこへ通り合せた上京の男、座頭の風流心にすっかり感じ入り、意気投合しての酒盛りの後、別れを告げて帰ろうとした男、ふと悪戯心を起し、別人のふりをして座頭に突き当り、散々にこれを打こかして入る。座頭はよう〳〵に起き上りながら、世には様々な人が居るものと嘆息し、くしゃみ留めでとまる。

片輪物を扱った狂言はどれもその不具を笑いものにし、片輪者は散々な目に逢うのが常であり、本曲もその例にもれるものではない。しかしながら前半の二人の気の合った楽しい酒宴、しみ〴〵とした周囲の状景とほのかに通う二人の友情にも似た人間味は、同じ盲目の夫とその妻の愛情を扱った和泉流「川上」と共通するものであり、観客の心を打つものがあろう。そして一転しての男の変心、座頭の嘆きにも似たつぶやきにあわれさを感じながら、ふと笑いの対象にされているのは、結局座頭なのか、その男なのか、いや目あきすべての人なのか——考えさせられてしまう。冷たい夜露に濡れてのくしゃみどめの余韻は、深く観る者に人間性の複雑さを考えさせずにはおかないであろう。

（鈍太郎）

十月の予告

十月　一日　市民会館落成記念祝賀能　於市民会館

能　翁　観世元正　面箱　三番叟　千才　井上松次郎　和泉保之　片山博太郎

十月　一日　九皐会

能　半蔀　橋本とも　高安滋郎

狂　狐塚　佐藤卯三郎　佐藤友彦　大野弘之

十月　八日　淡交会

能　定家　伊藤長八　高安滋郎

間　井上松次郎

十月　八日　金令会　於岡崎随念寺

能　弱法師　鈴木篤一郎　佐藤秀雄

間　佐藤友彦

狂　盆山　佐藤秀雄

十月　十日　和泉会　於市民会館

狂　末広がり　和泉保之　野村又三郎　井上祐一

空腕　野村万蔵　野村又三郎

金岡　井上松次郎　井上礼之助

月見座頭　大蔵弥太郎　善竹忠一郎

佐藤卯三郎　大野弘之

首引　佐藤秀雄　井上義祇

佐藤友彦　鷺見政行

井上義次

今歌村鴻助

井石田豊弘　井上良治　井上喜樹

十月十四日　橘瓢会

能　熊野　奥田敏子　高安滋郎

十月十五日　邦謡会

十月廿八日　叶石会　一謡会

西尾孫太郎師追善会

能　田村　山本一　高安滋郎

間　佐藤秀雄

狂　鬼瓦　野村又三郎　井上礼之助

十月廿九日　青陽会

能　俊寛　佐藤太俊　西村欽也

間　佐藤卯三郎

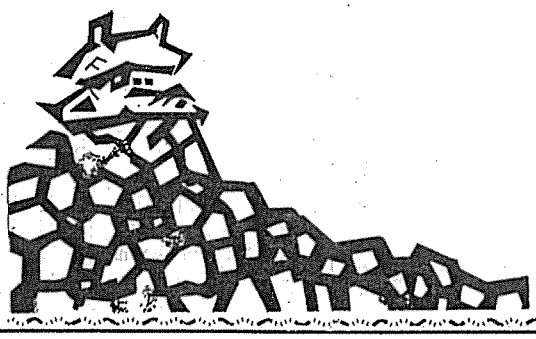
能　半蔀　塚本秀雄　高安滋郎

間　井上松次郎

能　融　観世武雄　高安滋郎

間　佐藤秀雄

狂　酢薑　佐藤友彦　大野弘之



城　割烹・小料理

熱田能楽殿内喫茶部
・住吉小路（中区栄3-10）
電話241-0248
・喫茶とグリル　労働文化センター内
電話731-1128

狂言

昭和47年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1490
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

＊台風一過、秋晴れの良い日が続いておりますが、皆様のお宅はいかがでしたでしょうか。日一日と深まり行く秋の気配に、衣替えの仕度も忙しく、行楽の楽しい計画にも余念のない今日此頃です。

＊長い間の中国との断絶を埋めるべく田中首相一行の訪中により、晴れて中国との国交回復が実現の運びとなりました。さかのぼれば能狂言の母体である散楽も古くは中国から渡った物、日中の文化交流も今後大いに発展するものと期待してよいでしょう。

＊恒例の和泉会が十月十日開催されます。これに先立って十月一日には名古屋市民会館が落成、ごけら落しに観世元正氏の翁、和泉保之氏の三番叟でオープンします。スポーツの殿堂として永らく市民に愛された金山体育館跡に新しく市民の文化として生れ代った市民会館、第十二回和泉会はこの会館記念として東西より大蔵、和泉両宗家、人間国宝野村万蔵氏、大蔵流重慎善竹忠一郎氏の来演を得て華やかに開催されます。どうかご期待下さい。

十月の催能

十月　一日　於　市民会館落成記念祝賀能
能　翁　観世元正
面箱　井上松次郎
三番叟　和泉保之
千才　片山博太郎

十月　一日　九皐会
能　半蔀　橋本とも　高安滋郎
狂　狐塚　佐藤卯三郎　佐藤友彦　大野弘之

十月　八日　淡交会
能　定家　伊藤長八　高安滋郎
間　井上松次郎

十月　八日　金令会　於　岡崎随念寺
能　弱法師　鈴木篤一郎
間　佐藤卯三郎
狂　盆山　佐藤友彦　佐藤秀雄

十月　十日　和泉会　於　市民会館
狂　末広かり　和泉保之　野村万蔵
空腕　野村万蔵　野村又三郎
金岡　井上松次郎　井上礼之助
月見座頭　大蔵弥太郎　善竹忠一郎

十月十四日　橘諷会
能　熊野　奥田敏子　高安滋郎
首引　佐藤卯三郎　大野弘之
佐藤秀雄　井井上義祐一
佐藤友彦　鷺見政行
今枝良治　歌村鴻助
井石井上喜樹弘　豊

十月十五日　邦謡会

十月廿八日　叶石会　一謡会
能　田村　山本一　高安滋郎
間　大野弘之　野村又三郎　井上礼之助
狂　鬼瓦

十月廿九日　青陽会
能　俊寛　佐藤太俊　西村欽也
間　佐藤卯三郎
能　半蔀　塚本秀雄　高安滋郎
間　井上松次郎
能　融　観世武雄　高安滋郎
間　佐藤秀雄
狂　酢蓋　佐藤友彦　大野弘之

狂言解説

狐塚＝ようやく狐塚にある田に稲の実る頃、主は太郎冠者に田の番に一人行かせます。憶病者の太郎冠者は夜に入って見舞に来た次郎冠者、主を狐が化けたものと思い込み次々としばりあげ、松葉でいぶして声を現せと責め立て、遂に皮をはがんと鎌の用意にかゝります。

盆山＝流行の盆山を手に入れんものと、ある男が知人の家に盗みに入りました。物音を聞きつけおっ取り刀でとびだした男が植え込みの影に隠れた人影を見れば、どうやら知人の様です。そのためことをあらだてず、適当にからかって帰そうと……。

鬼瓦＝永の在京の大名、訴訟に勝って目出たく国許へ帰ることになりました。今日はお礼参りに因幡堂の薬師に出かけます。薬師堂の周囲を巡る大名が突然泣き出しました。見れば大名の指す先にいかめしい鬼瓦が――。

酢蓋（すはじかみ）＝声高らかに行商して歩く酢売と蓋売とが出くわしました。互に先を譲らず、商い司を争って遂に秀句合戦となります。秀句とは互いの商売物によそえて酢売は「す」の文字を、蓋売は「から（辛）」の文字をおり込んでの言語遊戯です。

狂言大小

野村広二

九月中旬台風の一夜が明けると、高い青空が一杯ひろがる天気。弁慶草はその名に似合わぬかわいい紅い花をもたせているが、泰山木の大木は太根をあらわにして大きく傾く。それから数日は台風の跡仕末。みなさまのお家はどうだったでしょうか。そして二十二日の明月を迎える。荒れた庭からススキと萩をわずかに得て、紅い花を添えて飾る。その夜は、あれから少しく落ちついた気持で、能の本を手にする。風巻景次郎氏の「謡曲」（日本古典読本）。高砂・田村・井筒・松風に融ほか、十曲。実は明月の夜、雪月花の三つのうちの月に関係する字句に見参したいためでもあった。「月もろともに」（高砂）「出でたる月の」（田村）「月も傾く軒端の草」「月ぞさやけき」（井筒）「更けゆく月こそ」（松風）「月の夜念仏」（隅田川）「空すみのぼる月影に」「三日月の」（融）まですべて月をめで、月下の舞台を構成とする曲ばかり。世阿弥の曲が多い。次に狂言はと古川久さんの「狂言辞典・語い篇」を拝見する。「月代（つきし

ろ）」（空腕、この曲は十月の名古屋和泉会で「月見座頭」とともに上演される）「月星日」（佐度狐）「月待ち」（大般若）「月は一つ云々」（棒縛）ほか数項目。その次は、「烏は月に鳴き候よ」（花子）「雲早ければ月運ぶ」（水汲）「月にうそぶく」（鳴子）「片割月」（馘猿）などを、藤田徳太郎氏の「閑吟集・付・狂言小歌集」（岩波文庫）にみつける。終りの方は口ずさみながら頁をくる。月下の狂言は何といっても「月見座頭」。「月を眺めることもない」の「川上」もよい。「節分」「狐塚」「石神」「お茶の水」「連歌盗人」などにはその情景に何となくぼんやり月がほしい。同じ夜、教養特集（NHKテレビ、以下放送はおなじ）で「新古今集」をみたが、このなかで「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ」（定家）の一首から当時の伝統に対する精神的断絶と新時代到来の深い話をきいた。これにもあえて薄い月を点景として添えてみたい幻想に駆られる明月の夜であった。

今年の大衆能の演能は、狂言の「三人片輪」（松・礼・又・友）をはじめすばらしかった。放送は「玄象」（万三郎）をみ、「野宮」（山本博之）をきく。本は「アガメムノーン」（冥の会、芸術新潮八月、好評）「歌舞伎・能・狂言・新劇渡欧」（世阿弥座・現代狂言グループほか、朝日、九・二）など。また九月は古典芸能シリーズ・能の切手が発売。田村・羽衣・葵上。美しい。

千秋楽

西村弘敬

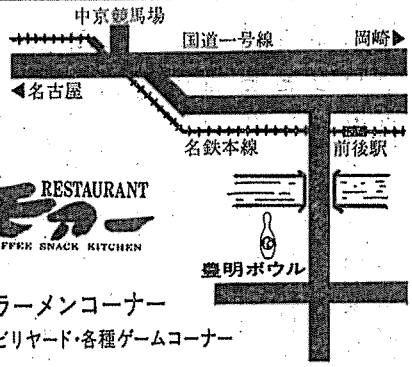
相撲や芝居などで、最終の日の事を千秋楽と云って居るが、千秋楽とは本来雅楽の曲目の名で、千秋楽、万才楽太平楽、還城楽、秋風楽など、色々の曲目がある。どういうわけで最終日の事を千秋楽といふか、何か確固たる理由があるのやらも知れぬが、私は次の様な理由でないかと想像して居るが、或は間違って居るやも知れぬので、大方諸賢の御教示を仰ぎたい。

能楽の催しやら、囃子会謡会などでは、同一曲目を毎日繰返し演奏する事はなく、たとへ二日三日と連続して催能する場合でも、儀式的の翁だけは演者を替えて出す事もあれど、其他の曲目は必ず全部異なる曲にする事として居る、而して通常の催能には、其日の最終曲の次に、附祝言（つけしうげん）とて、何か目出度文句の謡を二三句謡ひ、其日の終了を祝ふ習慣になって居る。又追善の催しには附祝言の代りに追加として追善にふさわしい句の謡を謡ふ習慣である。而して之等の謡には別段定まりたるものはなく、何でも差支ない筈であるが、多くの場合に高砂の切り「千秋楽は民を撫で」より終り迄四句謡ふのが、よく用いられるので之等の習慣を知らぬ人が千秋楽を聞き之が終りのしるしと誤解せられて、終りの事を千秋楽と思い違いして居るものと、私は察して居るが、扨如何のものでしようか。

十一月の予告

十一月三日　幸友会　囃子会
十一月五日　風韻会
能　巴　守部　啓子　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
能　井筒　水野　雍子　西村　欽也
半能　天鼓　富士道周明　高安　滋郎
狂　雁大名　佐藤卯三郎　佐藤　友彦　大野　弘之
十一月十一日　修瓢会
十一月十三日　大声会　於　名演会館
萩大名　佐藤　友彦　佐藤　秀雄　鷺見　政行
文山賊　野村又三郎　井上礼之助
因幡堂　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄
不見不聞　井上松次郎　佐藤　友彦　大野　弘之
十一月十五日　麦ノ会
能　田村　衣斐　正宜　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　羽衣　長田　驍　西村　欽也
狂　仏師　野村又三郎　佐藤　秀雄
十一月十九日　観世会
能　頼政　梅若　六郎　高安　滋郎
間　井上礼之助
能　半蔀　観世鉄之丞　市場　豊久
間　佐藤　秀雄
能　鉄輪　大槻　秀夫　西村　欽也
間　大野　弘之
狂　柿山伏　和泉　保之　井上松次郎
十一月廿三日　観衛会
能　世阿望　憶　山本　博之
間　茂山千五郎　茂山あきら
能　野宮　鈴木きくゑ　斉田　太市
間　井上松次郎　高安　滋郎
能　山姥　山崎　栄治　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
狂　文荷　佐藤卯三郎　井上礼之助
佐藤　友彦
十一月廿六日　竹韻会
能　俊寛　杉村　竹翠　高安　滋郎
間　井上松次郎

明るく健康的な——
スポーツボウリング
豊明ボウル
井上禮之助（狂言共同社同人）
豊明市栄町上姥子（名鉄前後駅前）　(0562)97－1211(代)



★ラーメンコーナー
★ビリヤード・各種ゲームコーナー

狂言

昭和47年11月1日発行
発行所
名古屋市中区栄門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

＊めっきり冷え込んで参りました。こおろぎの音もいつか止み、元気に鳴き続けた鈴虫も、今は羽根だけが散乱する鉢の底で雌が一匹だけ寂しくひそんでおります。秋もいよ〳〵深まり、やがて木枯しの季節です。

＊国会の解散も決定的、師走選挙を控えてにわかに街頭の動きが活発化して来ました。日頃政治に無関心な市民等もにわかに情勢を気にする此頃です。選挙期間と投票日だけの主権者に終らぬ様、日常生活の中で不断に政治に参加する態度を持ち続けることこそ大切なことと思われます。

＊十月十日、名古屋市民会館にて催された「名古屋和泉会」も盛況のうちに終えることが出来ました。ひとえに御愛好の方々によるものと、関係者一同深く感謝いたしております。

ところで此公演を御覧いただいた愛好者の方から、「金岡」について次の二首の歌が寄せられましたので御紹介します。

六郎兵衛の笛や愛(カナ)しく吹き添いて
金岡首を振りにけるかも

腹立ちや〳〵妻の床鳴(ユカ)らし
入りにしあとのをかし味に居る
（吾一）

＊十一月十三日（月）「名古屋狂言小劇場」が第三回公演を名演会館にて開催します。狂言をテーマに添って捉えて行くシリーズで、今回は〈庶民の詩〉その二回目です。是非御観賞下さい。

＊十一月二十三日（祭）は山本博之師の喜寿祝賀能が予定されている。珍しい新作能「世阿望憶」を山本博之師のシテで演ぜられる。これは故片山博通の新作能で、当地での上演は初めてのものであり、間狂言にも大蔵流茂山千五郎師他が来演の予定である（入場無料）

＊十二月三日には、既に年末恒例の催しとなった「義捐金募集能」が、能楽協会名古屋支部の主催で開かれます。この会の収入はすべて愛知県及び名古屋市を通じて福祉施設へと寄附されるものであります。その趣旨をお汲みとりの上、是非とも御鑑賞下さい。

十一月の催能

十一月三日　幸友会　囃子会
十一月五日　風韻会
能　巴　守部　啓子　高安　滋郎
能　井筒　佐藤　秀雄
半能　天鼓　水野　雍子　富士道周明
狂　雁大名　佐藤　卯三郎

十一月十一日　修諷会
十一月十三日　大声会　於　名演会館
萩大名　佐藤　友彦
文山賊　野村又三郎　井上礼之助
因幡堂　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄
不見不聞　井上松次郎　大野　弘之　佐藤　友彦

十一月十五日
能　田村　衣斐　正宜　高安　滋郎
能　羽衣　井上松次郎　長田　驍　西村　欽也
狂　仏師　野村又三郎　佐藤　秀雄

十一月十九日
能　頼政　梅若　六郎　高安　滋郎
能　半蔀　井上礼之助　観世鉄之丞　市場　豊久
能　鉄輪　佐藤　秀雄　大槻　秀夫　西村　欽也

十一月廿三日
狂　柿山伏　和泉　保之　大野　弘之　井上松次郎
能　観衛会　世阿望憶　山本　博之
能　野宮　茂山千五郎　茂山あきら　斉田　太市
能　山姥　鈴木きくゑ　高安　滋郎
能　山姥　井上松次郎　山崎　栄治　西村　欽也
狂　文荷　佐藤　秀雄　佐藤　卯三郎　井上礼之助　井上松次郎

十一月廿六日
能　俊寛　竹韻会　杉村　竹翠　高安　滋郎
能　井上松次郎

狂言解説

雁大名＝永々在京する大名、訴訟に勝って近日国許へ下る事になりましたが在京中世話になった人々に振舞わんと酒の肴に初雁を買おうとしますが、永の在京で烏目も使い果たしてありません。一計を案じた主従は、金なしで雁を手に入れんと一芝居打つことになりました――。

佛師＝地蔵堂を新築し、仏を買いに上った田舎者にスッパがまんまとわたりをつけました。仏師と偽り、自分が仏に変装して烏目だけとって逃げようとするのですが――。

柿山伏＝大峰・葛城での修業を無事終えた山伏、国許への帰路、見事に熟れた柿を見つけました。畑主の居ぬのを幸い柿の木に上って食べている所を見廻りに来た畑主に見つけられてしまいます。葉蔭にかくれた山伏を畑主は散々になぶった挙句、鶯に仕立てで柿の木から落してしまいます。

文荷＝近頃少人遊びに余念のない主が、今日も二人の冠者に雅児千みつのもとへ文の使いにやりました。大事の文を代る〳〵に持ち、遂には二人で片荷にして持ち歩きますが、あまりの文の重さに合点が行かず、とう〳〵途中で文を開いてしまいました。重いも道理、中には――。

狂言大小

野村広二

十一月、あついレモンティがうまくなる季節を迎える。三日の文化の日には雨の中に庭の菊を手折って部屋を飾る。名古屋城、新宿御苑の菊もテレビ

（NHK、以下おなじみ）で居ながらにみる。「三井寺」（喜多実）もテレビで味わう。十月から十一月のはじめにかけては、おなじくテレビで、「黒塚」（金剛巌）「一角仙人」（観世元昭）もみたが、一と月で三つもみることはめづらしく特筆したい。どれも佳品であった。今年の名古屋和泉会（第十二回、十日）は新築の名古屋市民会館のホールで。千二百名程の見物席。七割位入った愛好者は五番のどの狂言も熱心に鑑賞する。おおらかな、「末広」（保之）風格のある万蔵演ずる「空腕」人間の表裏をしっかりと見せた「月見座頭」（弥太郎・忠一郎）。それにむつかしい「金岡」を好演した松次郎、礼之助。にぎやかで気の合った「首引」（卯三郎ほか）。金岡のアシライの笛は藤田六郎兵ヱ。熱い恋心を愁いのなかにちょっぴり明るく、しみじみときかせ、この曲をひきたたせていた。「唐人相撲」でみづから相撲をとるため玉座をおりた皇帝の身仕度にアシらう笛もなかなかよいもので、あれは威厳あって明るいなかに一抹愁いがある。この曲と好対照におゝわれた。旅行は「卒都婆小町」（金剛流、広田陞一）をみに京都へ。松茸や丹波栗の出盛りの頃であった。催しは、丸善の豪華本などの展示。古林清茂墨跡「月林」道号の掛軸の前には、随分と長く立つ。秋の狂言や能の名曲に通ずるよう。日本伝統工芸展（オリエンタル中村）の人形にも「初音」「こわい噺」「高雄」に狂言、「歌時計」に能の味を汲みとる。「北川民次版画展」（日動画廊）では「母子像」の初々しさ「バッタ」のたくましさにも同様。それから源氏物語展をたづねて蓬左文庫、永徳、等伯、友松展の徳川美術館まで足をのばす。河内本の「源氏」の第一頁を織茂三郎氏筆写文と見くらべながらたどる。北条実時の奥書はいつみてもなつかしい。永徳の方は、その「琴棋書画」の襖絵がイデアの世界を呼びおこす。それも能の世界であろう。二日間の秋の散歩で方々駈け廻った軽い疲れのうちに、狂言や能のつながりを引き出した、ところよい飽和感がみなぎる。十一月一日、米詩人エズラ・パンド氏八十七才の高令で逝去。能のよき理解者、紹介者であることはいつまでも記念されよう。

十二月の予告

十二月三日　義捐能

十二月十日　宝生定式能

能　蟬　丸　倉本　雅　西村欽也
間　佐藤友彦

能　葵　上　野村蘭作　高安滋郎
間　佐藤卯三郎

狂　雁　礫　大野弘之　井上松次郎
佐藤　秀雄

和四十八年一月の予告

一月　六日　学生自演能

一月十五日　清　韻　会

一月廿一日　宝生定式能

能　熊　野　倉本　雅　西村欽也
能　国　栖　野口緑久　西村欽也
間　井上礼之助　佐藤友彦

一月廿八日　三人の会

能　通小町　和島富太郎
能　国　栖　泉　嘉夫
間　井上礼之助　佐藤友彦

狂　止動方角　野村又三郎　井上松次郎
佐藤卯三郎
井上礼之助

歳末助け合い 義捐金募集能（第四回）

昭和四十七年十二月三日（日）午前十一時始
於　熱田神宮能楽殿

能組

熊沢恵美子
殿島　修二

（観）鉢　木　高安滋郎　吉田　定男
高安勝久　後藤孝一郎　筧　三男
間　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄

後見　加藤総兵衛　岡田　光紘
河村　鉦二　地謡　真柄　米次　尾関健太郎　柴田　収武　杉村　竹翠　柴田初太郎　増田　一雄　高野瀬　透

仕舞　老　松　加藤良久
（観）富士太鼓　有賀滋子　地謡　福井　道子　服部　紗枝　吉田　妙　高木美智子

舞囃子（宝）融　内藤泰二　吉田　定男
福井啓次郎　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎　吉田　俊彦　地謡　鬼頭　嘉男　衣斐　正宜　辰己

能　玉　葛　西村　欽也　筧　鉦一
間　井上松次郎　柳原富司忠　鬼頭　季信

後見　戸田秀雄
前　鈴木義久

（喜）玉ノ段　長田　驍　地謡　富田　二郎　井上礼之助　佐藤　秀雄　山本　栄逸　陽二　才

狂言　蝸　牛　野村又三郎

能（観）猩　々　高安　滋郎　河村総一郎　助川　竜夫　福井　良久　藤田　昭彦
河村　鉦二

（春）鵜ノ段　前田茂穂　地謡　後藤　正宜　瑞弘　広瀬　俊彦　内藤　泰二　辰己　衣斐　正宜　孝一　竹腰　勝寿　加藤　勝利　竹内　澄子　和子　戸田　地謡　嘉男　吉田　鬼頭　竹腰　勝一　稲川　寿一　加藤　勝利

仕舞（剛）笹ノ段　片野東四郎　地謡　菊川　憲三　百々　康治　日比野　圭昭　大塚　一二　山田　仁三郎　水谷　泰典　後藤　広瀬　塚本　恵鉄　正瑞　市郎　男弘

（終了午後四時頃）

会費　一、〇〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　主催　能楽協会名古屋支部
プレイガイド　愛知県
事務所　名古屋市瑞穂区後援　名古屋能楽会
玉水町二一六四　高安方